

第三章 王墓とその時代

第一節 王の出現

古墳時代 古墳時代のはじまりを紀元何年からするかという紀年の問題は、研究者によって異なるのが年代が現状である。ある者は三世紀中頃とし、またある説は三〇〇年を遡り得ないとする。そこには半世紀もの差がある。いずれが真に近いのであろうか。少なくとも古墳出現の時をもって、古墳時代と呼ぶとしても、最古の古墳がどれなのか、明確であるわけではない。そこで、高槻市域にある古墳に限定して、古墳の出現の年代を考えてみようと思う。

古墳時代というのは、一口にいえば古墳がつくられた時代のことである。だから、この時代の細かい時期区分については従来、研究の主たる対象であった古墳の特徴を析出して、いろいろな区分案がつけられてきた。だが、古墳をつくらない前後の時代や地域との関係を考察すると、まことにやっかいなことになる。のぞましいのは、どこでも、いつでも対比できる材料を基準にすることである。その要求にかなうのは、土器であろう。古墳時代には二系統の土器がある。一つは弥生土器の系統をひく、赤褐色をした土器で

「土師器」と呼ばれている。もう一つは、朝鮮半島を通じて、新たに古墳時代に渡ってきた風色をした土器で、「須恵器」と呼ばれている。須恵器がいつから出現するかという年代の問題は、極めて重要である。それは土器の歴史だけに限ってみても、土師器と須恵器という硬軟二つの土器——正しくは土器と陶器といふべきかもしれないが——を使う長い歴史がこのあとに続くからである。

須恵器については、大阪府南部の陶邑すゑの窯跡をはじめとして、生産址を対象として調査がおこなわれ、須恵器の編年体系が田辺昭三氏によってつくられた。それは詳細を極め、一世紀間に五つの型式を設けている。だが、調査の対象が生産址であるところから、共存する土師器との関連が明確でない。

一方、土師器については、諸研究者によって、部分的な編年案が提出されているものの、一貫した編年体系はみられないのが現状である。ただ、もっと後の時代になると、平城宮跡などの官殿・官衙遺構のある遺跡で、木簡等の文字資料と共存する時期の土器については、確かな年代が与えられている。また、局部的ではあるが、須恵器出現前後の、土師器・須恵器の組成も知られているので、須恵器出現の年代を確定できるなら、その前後の時期について、土器による年代の決定も可能になる。

さて、それでは須恵器はいつ出現したと考えられるだろうか。かつては、日本書紀の雄略七年条にみえる陶部すゑ高貴を一つの目安とした時期もあった。しかし、この記事が須恵器流入のことを語っているとしてみても、最古であるという保証はない。まして、書紀が記載する大王の実年代をどう解するかという基本的な問題で困難がある。現在、諸研究者によって、掲げる根拠は相違しても、五世紀の初めとか中頃といった具合に、ほぼ五世紀の中で考えようとしている状況にある。いまここでは、須恵器と類縁関係にある朝鮮半島の新羅

焼土器およびそれらに連なる灰陶系土器の相關關係を一つの拠所として、須惠器初現の年代を四三〇～四四〇年頃と推定しておこう〔原口正三「須惠器の源流を」たずねて』「古代史発掘」6〕。ただ、これはある目安にすぎない。

ところで、須惠器出現前の土師器に関する編年については、大阪府柏原市船橋遺跡の土器組成を出発点とし〔原口・田辺・田中佐原「河内船橋遺跡出土土器」、弥生時代後期の編年に用いられた大阪府松原市上田町の資料〔原口「物の研究」(2)〕大阪府文化財調査報告書11〕、およびその間に介在する東大阪小若江北遺跡の資料〔坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡大阪府立島上高等学校校研究紀要復刊3」〕およびその間に介在する東大阪小若江北遺跡の資料〔跡岡査報告』岡山県高島遺跡調査委員等〕を活用して、上田町Ⅱ式から船橋〇Ⅰ式までの間に四つの型式を設定しようと考ええる。それは、三世紀末から五世紀初めまでのほぼ一二〇年間に相当することになる。ただし、これもまた一つの試案にすぎない。今後なお検討の余地はあろう。

さて、そこで初めの問題にかえろう。高槻市域では、いつごろ古墳がつくられはじめたかという問題を、土器のものさしにあてはめて考えてみると、一つの手懸りとして、弁天山C1号墳の前方部埋葬施設に伴った土師器がある。その特徴は、小若江北遺跡の土器と近い。おそらく、その中の新しい部分に属するのである。だとすると弁天山C1号墳の年代は、四世紀の中頃を遡らないであろう。もしそう仮定することが認められるなら、前方後円墳の形態・規模・立地等から、C1号墳に先行する可能性のある二基の古墳（弁天山B1号墳・A1号墳）について、それぞれ首長の在位期間を三〇年と仮定した場合、最も古いと推定する弁天山B1号墳の年代は、四世紀の初頭を上限とすることになる。しかし、内容の明らかでない古墳について、年代を推定することは、単に想像の域を出ないのであって、今後慎重に検討すべき課題の一つであることはいうまでもない。

なお、高槻市域には、継体陵に比定される今城塚古墳がある。継体天皇の没年や古墳築造の幅をどうみるかで、多少年代のとり方は変わるかもしれないが、もし三品彰英氏の考証に従うとすれば、五三三年前後になる【三品彰英「継体紀の諸問」】。

さらに、もう一つ加えるべきものに、阿武山古墳があげられよう。もしこの被葬者を藤原鎌足とするなら、その没年六六九年を考慮しなければならぬだろう。だが、確証があるわけではないから、推測の域にとどめておこう。ただ、古墳時代の下限の年代を、市域内に限ってみたとき、ほぼ七世紀中頃は一つの目安になるであろう。

さて、以上に述べたところから、およそ四世紀初頭から七世紀中頃までの、ほぼ三五〇年間が、高槻市域内で古墳がつくられた時代であったことになる。以下の記述では、古墳時代を須惠器出現の時期を境に、それ以前を前期、以後を後期として記述することにした。なお、後期については、田辺昭三氏が設定した、須惠器の特徴による時期区分【平安学園考古学クラブ「陶器古窯址群Ⅰ」】に従って、Ⅰ期とⅡ期の境を五二〇年頃、Ⅱ期とⅢ期の境を六二〇年頃、Ⅲ期の終りを六八〇年頃とする。

王墓の丘

芥川の西岸に位置する南平台は、現在みるような平坦な丘ではなかった。標高一〇〇メートル前後の丘が起伏を重ねながら、ほぼ南北に走り、それを脊梁部とする尾根が幾筋も東へ伸びていた。それぞれの尾根の間には深い谷が東からはいり、谷筋にはせきとめてつくられた溜池がいくつもあった。脊梁部の高いところには、前方後円墳がつくられ、川西や服部からは、隆々たる墳丘を望むことができた。最も高い丘を利用してつくられた弁天山古墳（B1号墳）は直径約七〇メートル・高さ約一〇メートル

ルの大きな後円部と、その北へのびたやや短かい前方部とからなり、その全長は約一〇〇メートルである。後円部中央に、三角点の標石が設けてあり、その高さは海拔一〇四メートル余である。現在この古墳は南平台の住宅地の西側に、墳丘のみが高く残されている。この古墳の南約二〇〇メートルのところに岡本山古墳（A1号墳）がある。その位置は脊梁部の南端にあたり、最も平野部に近い。後円部の直径は約七〇メートルで、頂部の標高約九二メートル余、その東に前方部がある。全長約一二〇メートルである。名神高速道路と住宅造成のため、前方部の大部分が失われてしまった。B1号墳の北約三〇〇メートルのところに大蔵司西方古墳（C1号墳）があった。全長約七〇メートル、後円部径四三メートルの前方後円墳で、その主軸の方向はさきのA1号墳とほとんど一致する。後円頂部の標高は九五メートル余である。ゴルフ場のクラブ・ハウスのところにあつたが、ゴルフ場をつくるため姿を消してしまった。以上三基の前方後円墳が併立する様は、まことに「王墓の丘」の名にふさわしいものであつた。〔大阪府教委「弁天山古墳群の調査」大府報17。〕

三つの古墳 さて、この三基の前方後円墳が、同時につくられたことが考えがたいとすれば、それらがつの相互関係 くられた時間的前後関係はどう考えられるのだろうか。三基のうち、埋葬主体の調査されたのはC1号墳だけであるから、埋葬主体や副葬品を比較して前後関係を定めることはできない。しかし、古墳は特定の被葬者のために、自然の山丘に手を加えて、巨大な形をつくりあげてあるのだから、そのつくり山が景観的にどうなっているか、立地条件や大きさなどを比較検討するなら、ある程度の手懸りを得られるかもしれない。そこで、この三古墳を対比してみよう。

B1号墳とA1号墳の後円部の径はともに、約七〇メートル、その高さは約一〇メートルであつて、その

規模はよく似ている。B1号墳の全長がA1号墳より短いのは、前者の前方が地形に制約されて短いためである。A1号墳とC1号墳とを比べると、後者は前者の半分の規模につくられている。例えば、ともに三

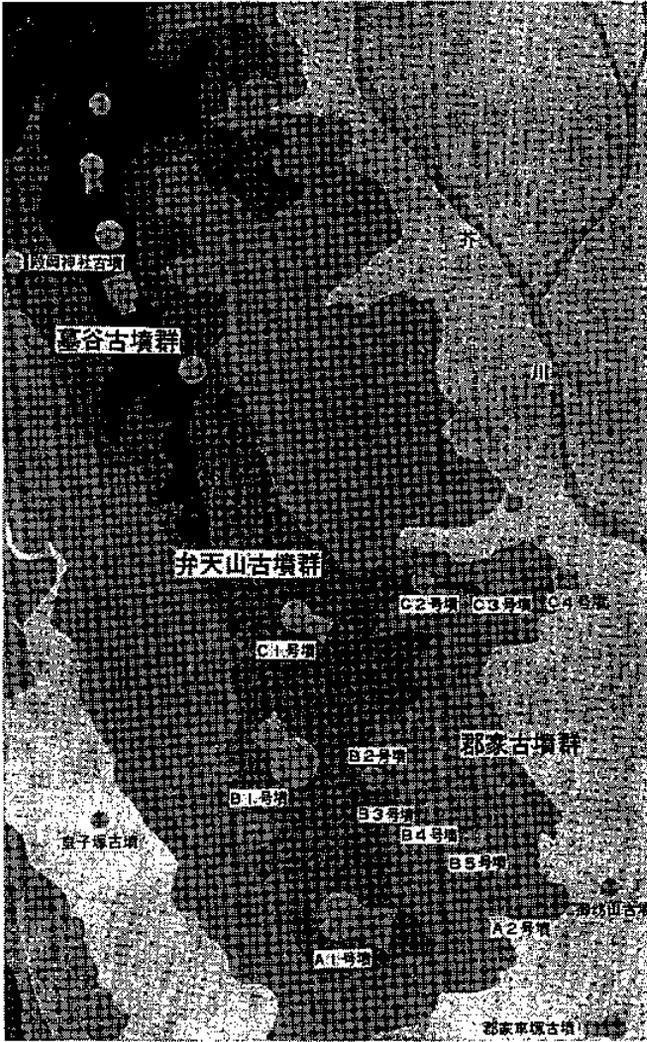


図110 弁天山古墳群



図111 三基の前方後円墳

段に築かれた前方部を備えているが、その前面上段の幅を測ってみるとA1号墳は四メートル、C1号墳は二メートルである。三基の古墳にみる、このような関係は偶然生じたものとは考えにくい。むしろ、この三基の間には、有機的な関連があるようにみえる。

墳丘の属性

そこで、この三基の古墳の立地条件を比べてみると、B1号墳が最も高いところを占め、どこからでも見えるすぐれた条件をもっている。これに対して、C1号墳は、望見し得る地域が限られ、三者の中で、最も不利な位置にある。三者間にみられる立地上の優劣は、古墳をつくる場合に、慎重に選択され検討されたに違いない。というのは、古墳そのものが、望見される対象物としての性格を、その属性としてもっているからである。例えば、B1号墳の全長がA1号墳に比べて約二〇メートル短いのは、前方部が短いからであるが、その短い前方部もよくみると、平野に面した東辺は長く、反対に奈佐原の谷筋にあたる西辺は短くつくられている。狭い尾根の上に方形の前方部をつくるために、平野に面する東辺を殊更に尾根筋にあわせた結果、両辺が等しくならなかったらしい。このように、見える部分を立派につくろうとする意図は、C1号墳の墳丘でもみられる。墳丘表面に葺かれた河原石の葺石面は、平野から見える部分は広範に、しかも立派につくられてあったが、臨

れる部分では必ずしも同じではなかった。

こうした古墳の属性に留意して、立地条件の選択の問題を考えてみると、先行するものが優位な条件を得、後行するものほど、選択の条件は限定されざるを得ないであろう。事実、墳丘の表面を飾る埴輪についてみても、C1号墳には多量の埴輪が認められるのに、A1号墳では少量であり、両者の壘形埴輪を比較すると、A1号墳のそれが型式的に先行する。また、B1号墳には、全く埴輪が認められないから、後代に埴輪の使用が一般化する傾向を考慮すると、この三古墳の時間的前後関係は、B1号墳↓A1号墳↓C1号墳の順につくられたと推定できる。

さきに見た、三基の前方後円墳の有機的関連を、このように、時間的に縦におきかえてみると、後行する古墳をつくる場合には、先行する古墳が構成する景観上の制約を何程か考慮せざるを得なかったであろう。三基の古墳は、いずれも脊梁部から東へ派生する尾根の結節点につくられ、しかも尾根上には、時間的に後続する円墳群が尾根の下手へむかって、順次配列されるという共通性をもっている。それは円墳群を系譜的に従えているともいえる。前方後円墳について、さきに指摘した「見られる属性」のほかに、さらに系譜的な表出をもその属性としてもっていることが知られる。尾根の結節点を選ぶということが、単に古墳築造の技術的側面からの帰結だけでなく、予めそうした系累上の墳墓地の選択をも前提としているとなると、古墳を生んだ社会、ひいては被葬者の性格にも、同じような属性が伴っていたと推定される。

前方後円 弥生時代の方形周溝墓が、成人・小児をも包摂する特定家族の墓であって、集落の外縁に墳の出現 くられる性質をもち、なお、ムラの共同墓地の中に營造されたことと比べるなら、前方後円

墳の立地・規模・形態は、歴然とした隔りを示している。たしかに、弥生時代後期の後半には、紅葺山遺跡の方形周溝墓にみるように、従来溝を共有して連接してつくる表現形態は失われてきつつあった。そしてのちにみるように、以後の時代にあっても、ムラの共同墓地は依然、集落の外辺にあり、方形の墓が併列するにしても、もはや溝を共有することはない。こうした、弥生時代後期以降の傾向が、その基底において、変質しつつあった社会の動向にもとづくものであらうということは推測に難くない。しかし、かつて弥生時代に成立した共同墓地のあり方は、依然、古墳時代にも持続したのであって、そこに截然とした区分を設けることは不可能である。そうした意味でも、唯一者のために隆然たる封土を築き、祭壇とみられる特殊な構造物を付加する形式の墓が誕生したことは、まことに突然の出現であり、自然発生的にどこにでも発生し得る性質のものではなかったといわねばならない。

山を削り、土を積み、石をもって外表面を蔽い、幾何学的整齐的な形をつくる技術が、はたして弥生時代の土木技術から生成したものであつたらうか。さきに見た三基の古墳の形態上の有機的關係に、ある種の尺度や方位の測定などを含む、弥生時代とは異なった技術体系が介在した可能性も考慮するなら、前方後円墳の発生の前提には、技術体系をも含んだ新しいイデオロギーの流入があつたことを想定せざるを得ない。

前方後円墳が、前代の方形周溝墓や同時代の共同墓地の方形墳と異質であることは、他にいくつもの相違点をあげて強調することができるだろう。むしろ、弥生時代の墓の研究がすすめば進むほど、両者の相違は大きくなりつつある。その最も異なる点は、死者を埋葬する共同墓地の「墓」と処を異にし、しかも巨大な祭壇を付設するという、誰しも強調する相違点にこそ、前方後円墳の特異性があるのであって、そこには「墓」

でおこなわれた儀式とは異なつた、特殊な儀式が存在すると考えるべきであろう。

前方後円 いったい、前方後円墳の被葬者とは何者なのであろうか。まずは、彼が眠っている施設を、墳の内側 弁天山C1号墳を例にとつて、のぞいてみよう。

後円部の、推定直径約一六メートルの墳頂部のほぼ中央には、墳丘の長軸の方向と五一・五度の角度で斜交して、竪穴式石室一基がつくられていた。石室を設けるために、墳丘築成後、深さ約一・八五メートルに達する墓壙を掘る。墓壙の底の広さは、東西の幅が五メートル前後、南北の長さが一〇メートル前後であつて、四辺とも外方へいくらか張り出した胸張りのある長方形である。壁面の傾斜度は六〇度内外。平坦な壙底の中央には、南北方向に、長さ約一〇メートル、幅約一・一・五メートル、深さ三〇センチメートル程の溝状の凹みが掘られている。のち、この部分に木棺を納置するための用意である。また壙底や凹み溝の下底面も、被葬者の足方向にあたる南側が、北側より約二〇センチメートル前後低いことも注意をひく。

竪穴式石室の壁体の構築に先立って、墓壙壁下をめぐる排水用の浅い溝を掘り、西南隅で墓壙外へ抜ける排水溝に通じる。幅約三〇センチメートルの排水溝中には拳大の礫をつめてある。一方、墓壙底全面に、厚さ約二〇センチメートルもの粘土を貼り、さきの木棺納置用の溝状凹みは、ことさら入念に貼りこんであつた。木棺は粘土床に残された圧痕から推定して、長さ約五・二六メートル、直径約八三センチメートル内外の割竹形木棺である。その棺材は被葬者の頭辺に一部残存していたものから、コウヤマキであることがわかつた。被葬者を収容するために刳貫いた木棺の両端には、厚さ一〇〜一五センチメートルの小口板があててあつたらしい。

を揃えて平積みにし、約八〇度の傾斜をもって、上方に持送り、石室横断面はあたかも台形を呈するようにつくられている。壁体の内部も平積みにした板石とその間につめられたプラスからなり、その上面は墳壁に近づくに従って低くなる。石室上部は幾枚かの厚い平石を架け並べて閉塞し、その上面や壁体の上面を粘土で被覆したのち、大きな墓壙を埋戻したものである。唯一人の被葬者のために、かくも重厚な施設を墳丘内に設けてあることは、他と区別される特殊性の最もよく表われた点である。

被葬者 ついで、彼の身辺にいかなる器物が副えられてあるかをみてみよう。長大な木棺そのものの身辺が、すでに特異な容器であるが、その材が弥生時代以来、棺材として用いられてきたコウヤ

マキである点は、在来の用材選択の知識を継承しているとみてよい。だが、棺内の副葬品をみると、俄然その様相は一変する。中国からもたらされた青銅製の二神二獸鏡、わが国でつくった四獸鏡各一面を表を上にして頭辺におき、しかも中国鏡がより頭に近い位置におかれてあった。頸には碧玉製の管玉やヒスイ製の勾玉を連ねた幾連もの頸飾りがあり、頭辺の左右には、碧玉製の腕輪が計七個あった。また足辺にも三角縁神獸鏡一面、碧玉製の腕輪二個、太い管玉を連ねた玉飾り、碧玉製の合子ゴウシや柄などが一揃いおいてあった。鏡に黒漆膜が付着していたのは、黒漆塗りの鏡函に納めてあったのだろう。棺内には朱がみられ、頭辺一帯は特に厚い。

棺側では、東側に銅鉄二九本が三個所に、鉄刀一振とともに副えてあり、西側には、鉄製の鎌・刀子チナ・鉈ヤリ各二、鋸ノコギリ・刀各一があった。また棺の南小口板直下の粘土床中に、鉄製の斧大小各一、鎌大小各一、刀子一が塗りこめてあった。こうした棺内外の副葬品のあり方もまた、ここに納められた人物が何者であるかを知

る鍵を与えてくれる。

つくり山の 被葬者は単に墓墳を掘って納めたわけではない。彼は修飾した円丘の中心におかれ、それに
つくり方 付設して方丘の祭壇が設けられなければならない。それには、さきに見たような選地の

条件と完成すべき前方後円の一組の特異な墳丘を構築できる地形が選ばれた。そのため、卜占の儀式があつたかどうかは知る由もないが、墳丘を築くにあたって、予め草を焼いた痕がみられる。また、墳丘の主要部に着手する際には、儀式があつたらしい。後円部前面直下の地山上に、局部的に土師器が見つかっている。

円丘と方丘の接合部をくびれ部と呼ぶが、その部分は両丘を界する部位であるだけに、入念に削り出した。削った土は、丘の形をつくる盛土として利用した。後円部の東側断面にあらわれたところによると、予め円丘の各段は、ほぼ計画された高さがあるらしい。それは斜面の長さの比が、上段・中段・下段のそれぞれで、三対二の一の割合らしい。土を積むには、まずブロックAをつみ、その上縁は当初においてほぼ円丘の外縁を決定する。その結果、盛土の各層は内側にむかって傾き、摺鉢状の盛土面ができることになる。さらに、Bブロックにみるように、盛土斜面に手を加えて中段に移り、最後にCブロックをおくことによつて丘形の盛土作業を終った。そのやり方は前方部でも同様である。その後、河原石を小口積みにながら、下方から上方へ葺石を葺きあげ、墳丘の斜面をかためる。その際、各斜面の下縁には、一きわ大きい根石を配列し、そこから葺石を積みあげ、一個一個入念に裏込めしていく様は、おどろくべき作業である。こうしてできあがった傾斜面の下辺には、幅一メートルほどの狭い平坦面ができる。この面にバラスを敷き埴輪を配列する。埴輪は墳丘部および上段下辺に主として配列されるが、その意とするところは、墳丘の荘嚴と聖域の

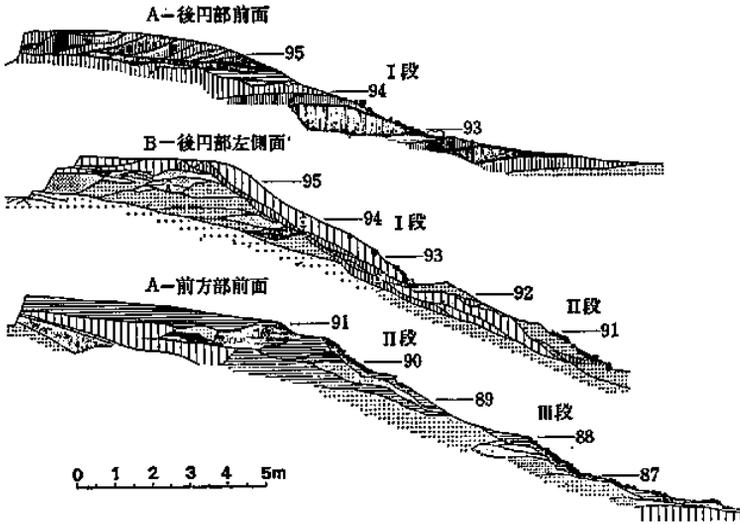


図113 弁天山C1号墳の墳丘断面

結果であるらしい。

全長七〇メートルほどの小規模な前方後円墳であり、後円部表面の半分が地崩れしているために隙を入れなかったにもかかわらず、墳丘表面に費した発掘調査のための延人員は、約一四四〇人であった。それは全調査延人員の約八五パーセントに相当する。

この古墳の盛土量は約二五〇〇立方メートル（ちなみに、東大阪市瓜生堂遺跡の弥生時代中期の方形周溝墓の盛土量は、約一〇〇立方メートルである）、削土量は約五〇〇立方メートルと算定され、その割合は五対一である。墳丘部の削土量だけでは不足するため、周辺から土をまかした。その結果、墳丘の周辺に平坦地ができている。全斜面の表面積約一九〇〇平方メートル、葦石の総量は約三〇万個、その重量は約四〇〇トン、このほかに平坦部や丘頂に敷くペラスを加えるなら、さらに数十トンを要する。また、

Ⅱ 考古学からみた原始・古代の高槻

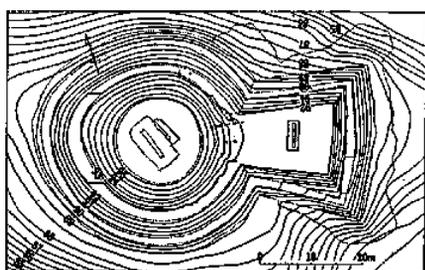
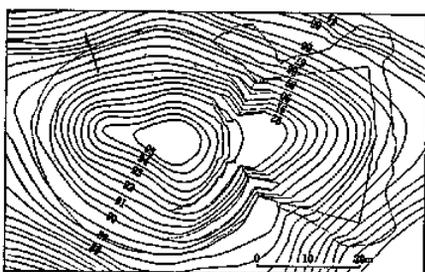


図114 弁天山C1号墳の墳丘築成

- 1 地山想定図
- 2 地山削土図
- 3 復元図

埴輪の総数二〇〇個以上と推定される。芥川までの距離五〇〇メートル、その比高二〇メートルの谷間の小径を、葺石やバラスを背負い、埴輪をかついで運ぶ様は、かつての弥生時代の墓づくりには見られない光景であった。ここにもまた、巨大な労働力を一身のためにかり出し得る力をもった唯一者の姿をみる事ができよう。

被葬者の 丁重につくられた施設や華麗な副葬品のみならず、それを蔵する巨大な人工のつくり山の構性 格 築をみるなら、この唯一の人物が只者でないことが知られよう。しかも、同じような墓が、市域で集中するのが、この南平台一帯であり、十指にも満たない数であることを見ると、こうした墓の被葬



図115 弁天山C1号墳の墳丘築成(想像図)

ているかの如くである。おそらく古墳の築造にあたっては、いくつかの段階にわかれた荘厳な儀式が、新たな首長の主宰のもとにおこなわれたのであつたらう。茨木市福井の將軍山古墳では、そうしたことを暗示するかのよう、赤色の顔料がふりまかれた面が、堅穴式石室の外辺で見つかっている〔小林行雄・近藤義郎「古墳の」〕。新たな首長の誕生に際して最初にとりおこなわれた祭儀が、前首長をおくる葬送の儀であつたとすれば、首

者が一個のムラの首長ではなく、いくつかのムラを地縁的に結合したクニとも呼ぶべき広い地域に勢力をもち、しかも、多数の人間の労働を自己一人の死後の奥城のために動員し、惜しげもなく、自己の身边に財宝をおくことのできる人物であつたことがわかる。死後もムラ外辺の共同墓地に葬られた前代の首長とは、あまりにも異質である。彼がもつ宝器の数々をみるなら、そこには祭祀を司る特殊な役割をもつた人間を想定できよう。われわれは彼を司祭者と呼ぶ。しかも、この司祭者はその財物や力が示すように、現実には政治の主導者でもあつた。彼の棺を納置する粘土床の中に、鉄製の斧や鎌・刀子がおかれてあつたが、それらの器物は、後代の天皇踐祚大嘗会に際して、鎌で草を払い、斧で木を伐り、鎌で掘って柱をたて、由岐と須岐の殿屋を建てる所作の縁由をも示し

Ⅱ 考古学からみた原始・古代の高槻

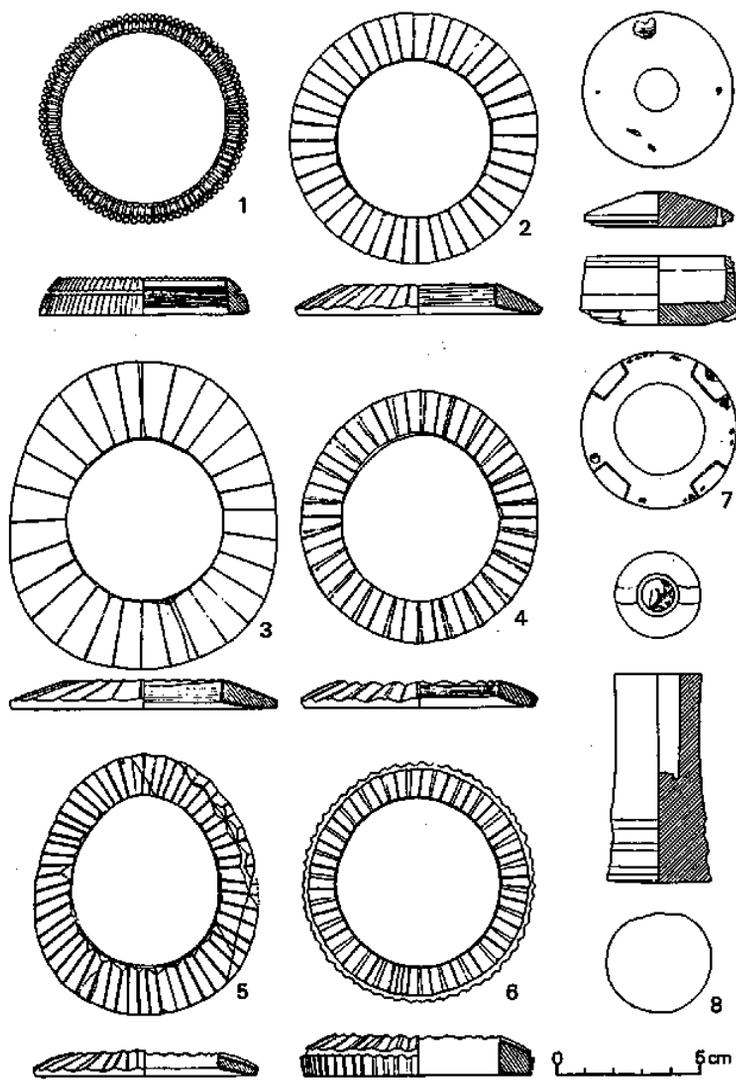


図116 弁天山C1号墳の碧玉製品（1・6石剣，2～5車輪石，
7合子，8筒形石製品）

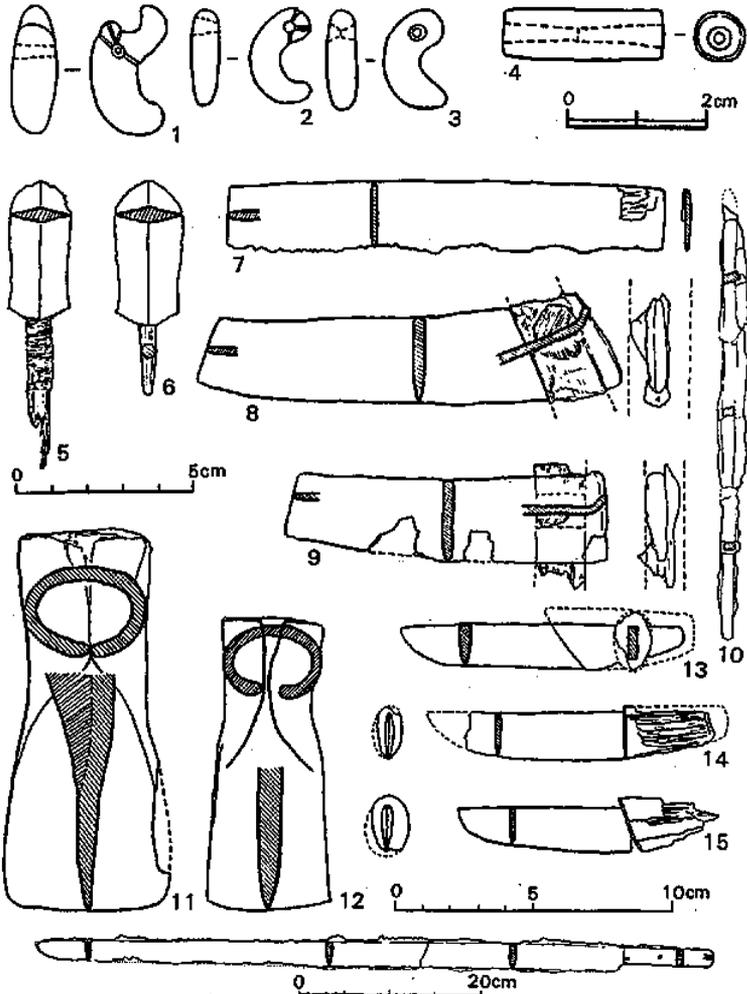


図117 弁天山C1号墳の玉類と鉄製品 (1~3硬玉製勾玉, 4碧玉製管玉, 5・6銅鏃, 7鉄鏃, 8・9鉄鏃, 10鉄筥, 11・12鉄斧, 13~15鉄刀子, 16鉄刀)

長権の継承・復活の場として、前方後円墳は一般の墓とは区別され、聖域と受けとられていたであろう。そうでなければこそ、営々とした労働の奉獻と、さらに埴輪の荘厳が一体となって、丘上に隔絶した空間を創出し得たのではなかったか。そういった意味で、これを単なる墓とし、被葬者を死者として一般化してうけとるわけにはいかない。そして、このような構造的記念物が、北九州や瀬戸内ではなく、畿内で発展したところをみると、前方後円墳の出現は、畿内の特異な政治的風土の中から萌芽したといえよう。その特異な風土とは何であったか。いま、ここでそのすべてを解きつくす余裕はないけれども、すでに弥生時代で指摘した、後期の新たな銅鐸祭祀にみる地縁的結合や、灰陶系鉄文化の流入に触発された叩技法にみる独自性、投馬図を媒体とする瀬戸内海上権の掌握と、それを踏まえた活発な中国王朝との交渉などを、その一端としてあげることができよう。その基底には急速に高まった平地の農業生産や手工業生産がより組織化され、飛躍的に増大しつつあったと推定する。弥生時代後期の丘上のムラが一斉にひきおろされて姿を消し、銅鐸が僻遠の場所に埋納されたのも、新たな政治的体制の中に組織化されていった徴証なのであろう。その動きは、おそらく三世紀の後半、約半世紀の間に一定の結末を得たと解する。一三九年にはじまる卑弥呼の朝貢は、親魏倭王の称号を獲得し、その後、数次の外交関係を重ねながら、急速に中国の文物を受容し、宗女台身におよんだ。その後、二六六年の西晋への朝貢も、おそらくその延長上におこなわれたのであろう。かつて、井本進氏が晋書記載の「園丘方丘」をとりあげ〔井本進「前方後円墳を洛陽の」〕、近くは山尾孝久氏がこの記載にふれ、前方後円墳の外貌を説くところがあった〔山尾孝久「魏」〕。中国王朝の宮廷でおこなわれた南北郊一至之祀が、説かれるように、その時点で倭にもたらされたとするなら、倭人朝貢の泰始二（二二六）年をもって、前方

後円墳はその上限年代の一点を得たことになる。はたしてそうであろうか。

伝世鏡

中国の漢代の鏡——例えば「方格規矩鏡」や「内行花文鏡」——が、古墳時代の開始に先立って、他の文物とともにわが国にもたらされていたことは、よく知られている。これらの鏡のほかにも、朝鮮半島でつくられた特異な凹面鏡である、多鈕細文鏡が、すでに凹面もある。そのうち、佐賀県と山口県の各一面は、弥生時代の墓から見つかった。他の二面は、奈良県と大阪府から見ついている。奈良県の例は銅鐸と共伴し、大阪府柏原市大泉の例も墓ではない。こうしてみると、北九州や本州西端の地域と畿内では、同じ鏡に対する態度を異にしていることが知られる。前者の場合は、鏡の保持者の死と共に、棺の中に埋められたけれども、後者の場合は銅鐸と共にその役割を終えたことになる。この相違は、鏡の側からみれば、特定の個人の所有物であったか、ムラの共有物であったかという相違になる。この鏡に対する両地域の態度の違いは、この鏡がもたらされた弥生時代中期に、すでに異なった風土が醸成されつつあったことを示すとともに、北方系の護符的な機能が畿内では共同の祭祀である銅鐸祭祀の器物として一体化していたことを示すのであろう。この鏡面が凹面であること、鈕が片方に偏して懸垂し得ることなどの特異性をあげずとも、この鏡が流入した時点が、古い銅鐸祭祀の時期であったことが、この器物の性格を決定的にしたのであろう。

ところで、小林行雄氏はかつて、茨木市宿久庄紫金山古墳で、「三角縁神獸鏡を主とするあたらしい一面の鏡が棺外におかれていたのに対して、伝世された方格規矩四神鏡一面のみは、棺内の遺骸の傍におかれていた事実」、福岡県銚子塚古墳でも仿製鏡八面と区別して、伝世の長宜子孫内行花文鏡および鍍金方格規



写20 多鈕細文鏡 (大阪府柏原市大泉)

矩四神鏡の二面が頭辺にあり、また、香川県石清尾山麓古墳出土の方格規矩四神鏡の磨滅を例証として、漢中期の中国鏡が二・三世紀にわたって伝世しただけでなく、古墳築造当時にも伝世品として区別してあつかわれたことを指摘された〔小林行雄「古墳の発生の歴史的考察」『史』、たしかに、舟天山C1号墳でも、中国製の二神二獸鏡(西晋の鏡か)が、被葬者の頭辺に最も近くおかれていたことは、この指摘の正しさを認めてよいであろう。

氏は、古墳から発見される漢中期の鏡が、二・三世紀にわたってわが国で伝世されたのは「その鏡の使用目的が、たとえば神宝ともよびうるような、伝世を必要とする祭祀的なものであったからであろう。」と推定し、古墳の造営者らは「伝世の宝器を保持しつづけたある司祭的首長の死にあたって、この首長の存在をより高めるために、はじめて古墳を作り、しかも宝器の伝世を絶ってこれを副葬品のうちにくわえることによって、かれをかくも権威あらしめた聖性の根元を、そこに棄て去ることをあえてしたのである。このような現象のおこりえた理由は、死者にかわって、あらたにその地位につくべき首長にとっては、もはやそのような旧い形の聖性の付与によって、その権威を保証せられねばならない必要がなくなっていたからであろう。一言にしていえば、権威の形式が革新せられたのである。」とさ

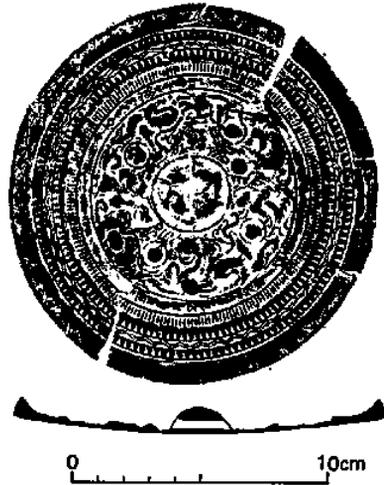


図118 弁天山C1号墳の二神二獸鏡

れた。それは宝鏡の伝世を絶つことに歴史的な意義を見出し、「古墳の発生を貴族の権威の革新の象徴」としてとらえ、その権威の内容を「世襲的首長の地位の恒常性の外的承認」と表現するものであった。これは古墳の発生に関して、従来みることのなかった画期的な提言であった。

同 範 鏡 弁天山C1号墳の堅穴式石室にあった
三面の鏡のうち、足辺にあった三角縁

神獸鏡は、同じ範（鑄型）でつくられた鏡が、愛知県

犬山市東之宮古墳（瓢箪山古墳）にある〔文化庁文化財保護部記念物課「国で保存した埋蔵文化財」東之宮古墳出土品一括「月刊文化財」一四一〕。この古墳は、犬山市の東北部にある丘陵上につくられた全長約七メートルの前方後方墳である。後方部の一辺約四〇メートル、前方部の幅約三三メートルという大きさは、弁天山C1号墳の規模に近い。東之宮古墳には、後方部に二箇所、前方部に一個所の埋葬施設があり、そのうち発掘した後方部の堅穴式石室から、例の同範鏡を含む中国製の三角縁神獸鏡五面のほか、方格規矩四神鏡一面、三獸鏡一面、四獸鏡四面、碧玉製の鍔形石一個、蓋付合子二個、石釧三個、車輪石一個、勾玉三個、管玉二三〇個、鉄製の大刀七本、劍三本、槍一九本、斧類七本、鐵六本、刀子一本といった多数の副葬品が見つかった。そのうち一個の碧玉製合子や石釧などは、弁天山C1号墳のものと似ている。

I 考古学からみた原始・古代の高槻

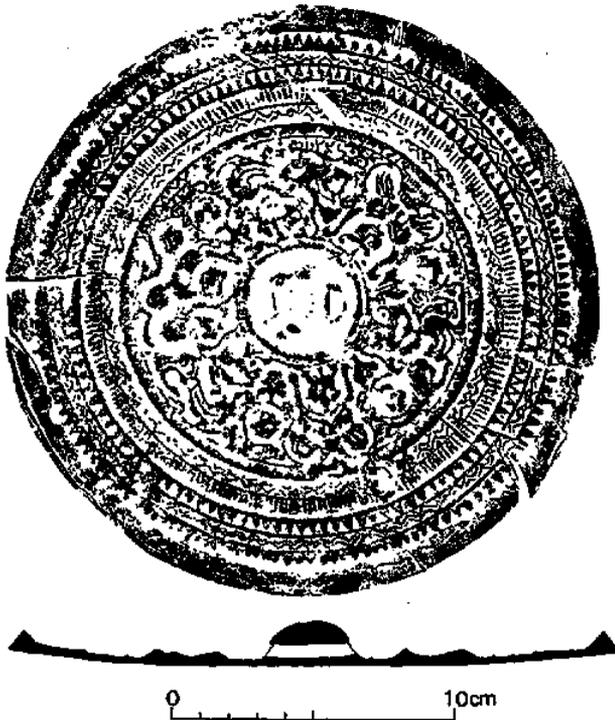
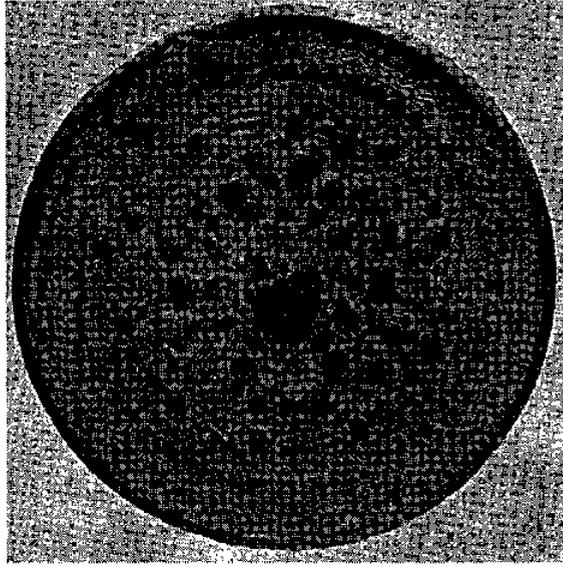


図119 弁天山C1号墳の波文帯三神三獣鏡

また、現在大阪阿武山赤十字病院の病棟がならぶ丘の南端、焼山（やきやま）から、かつて二面の三角縁神獸鏡が見つかった。いずれも、仿製三神三獣鏡であって、東京国立博物館に所蔵され、同館目録に八一四号と八四六八号の番号がが付されている。八一四号は「土室字阿武山」とあり、八四六八号は「土室字阿武山松林内」とある。最近わかったことだが、

この二面の鏡は、大正初年、土室の松井音吉氏（故人）が、八一四号鏡を見つけ、翌年八四六八号鏡を同じ場所で見つけたもので、当時二面とも博物館で買いあげてもらったという。音吉氏の子息に案内してもらったその場所は、病棟を建てた際削られていたけれども、墳丘の一部や埴輪片が認められた。その丘が焼山と呼ばれるところから、焼山古墳と命名した。円墳か前方後円墳か明らかでないが、今後調査すべき古墳である。



写21 焼山古墳の三神三獣鏡

この二面の鏡のうち、初めに見つかった鏡は、佐賀県谷口古墳や滋賀県天王山古墳に同範鏡がある。

このように、同じ鑄型でつくられた鏡が、弁天山C1号墳の場合は岐阜県の古墳に、焼山古墳の場合は佐賀県や滋賀県の古墳にあるということは、どういふことを示しているのであろうか。この同範鏡の問題を、精力的に追求されつつある小林行雄氏の論考を、精力的に追求されよう。

小林行雄氏は中国製の同範鏡をとりあげ、それが北九州から関東におよぶ各地の古墳に広範に分布し、しかも京都府相楽郡山城町椿井にある大塚山古墳にあった、三二面をこえる三角縁神獣鏡のうちに、大量な同範鏡があることについて、大塚山鏡群のかつての所有者が、各地の首長に対して自己の管理する同範鏡を分与したと推定した。そのことは、「地方における古墳の発生の原因を、たんなる首長権の世襲制の発生という内的要因のみでなく、その外的要因をくわえて、大和政権による承認をとまなつた」首長の出現と解することにつながる。そして、魏の鏡が輸入されてから、各地の古墳に副葬されるま

では、少なくとも半世紀以上の年代の開きがあると推定している〔小林行雄「古墳の発生の歴史」
 的意義』史林三八一〕。

魏から大量の鏡が輸入されたことについては、魏志倭人伝に、さまざまな賜物とともに銅鏡一〇〇面の記載がみえる。氏はこの鏡一〇〇面が、主として三角縁神獸鏡であったとみて、大塚山古墳の鏡群は、二五〇年頃にはすでに輸入されていたものと推定した。また仿製の三角縁神獸鏡にも多数の同范鏡がみられるところから、仿製鏡をもとりあげ、「古墳発見の仿製鏡のうちで、畿内において最初に大量につくられたのは、三角縁神獸鏡の一群」だったと考えた。その根拠に、鏡式が限られ、他の鏡式の手法を混用せず、鏡径が一定で、同范鏡がしばしばみられることをあげている。これに対し、方格規矩鏡や内行花文鏡を模したものは、細部に他の鏡式の手法が混用され、鏡径も大小任意で、むしろ大型鏡を作ることへの努力すらみられるとして、三角縁神獸鏡の輸入と配布の段階、仿製三角縁神獸鏡の製作と配布の段階、他の鏡式の仿製鏡が作られた段階を推定し、中国鏡と仿製鏡との配布は中心を異にしていたと推論した。そして、伝世鏡のほかは大部分が中国製三角縁神獸鏡からなる古い相のものと、仿製鏡をまじえた新しい相とに分ち、両相が古墳の年代差としてあらわれることを、碧玉製腕飾類で検証した。その結果この腕飾類は、古い相の鏡群をもつ古墳には絶無で、新しい相のものに伴うこと、そこから「三世紀中葉に輸入せられた中国鏡の所有ならびに分配に終始した古い型の所有者と、これにくわえて、それ以後あたらしく輸入せられた中国鏡や、あたらしく製作せられた仿製鏡の所有ならびに分配にも参加したあたらしい型の所有者」とがあったこと、そして古い型とは「中国からあたえられたものを、そのままうけとっている型」であり、「中国からあたえられたもの」、ある種の権威を認めて、そのまま特殊な用途に利用した形」である。それに対して、新しい型は「仿製鏡や

碧玉製腕飾類のように、自分の力でつくり出したものをそれにくわえた型」であり、「権威の象徴となりえたような器物を生産し供給する機構をもった、あたらしい文化活動の中枢に、かれらが直結したということである」とした。また「仿製鏡や碧玉製腕飾類をもつ古墳は、仿製鏡の型式と腕飾類の型式との組合わせによって、さらにこれを細分し、編年的考察に導くことが可能である」として、「三角縁神獸鏡の輸入期」、「その配布期としての古い相の鏡群の成立期」、「それを蔵した古墳の营造期」の三つの時期を区分して考え、鏡の輸入から古墳の营造までの間に、鏡の配布期をやや幅広く考え、その配布期は中国から輸入した器物にある権威を認めた段階であって、これに代る器物を製作し得た段階に先行するとともに、活動の中枢をも異にしていたと考えた。そして、古い相の鏡群の成立期における文化活動の中枢の性格を邪馬台国的なもの、新しい相の鏡群を蔵した古墳の营造期におけるその性格を、大和政権的なもの、そして、古い相の鏡群を蔵した古墳の营造期を、「邪馬台国的な文化活動の中枢が、大和政権的な文化活動の中枢へ移行する時期に、近接してもとめられる」とのべた〔小林行雄「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京』都大学文学部五十周年記念論集』「古墳時代の研究」所収〕。

かくして、三角縁神獸鏡の分布状態を検討することによって、初期の大和政権の勢力圏を考え、大塚山古墳との間同範鏡を分有する一六基の古墳に、中国製同範鏡を分有する古墳をも加え、計三六種九五面の同範鏡について、各鏡式を一〇種に分つとともに、(1)北九州、(2)中国・近畿西部、(3)畿内、(4)近畿東部・濃尾、(5)中部・関東の五地区に分けた。その分布をみると、まず(1)と(5)とにわたる分布を示すものがないこと、東方型の分布(2)~(5)を示すものは三角縁複像式神獸鏡類(鏡の内区を乳で四区に分けられている場合に、一区に神像二軀、または獸形二個を配してあるもの)であり、西方型の分布を示すものは三角縁単像式神獸鏡類(一

区に神像一軀と獸形一個を配したものであって、東西の地域差を生じた原因の一つが、鏡式の相違によることと、そして、中央型として類別される吾作銘複像式神鏡類の分布を介して、これと近似した分布を示す西方型分布圏を西方文化圏と解し、中央型分布圏は西方文化圏の初期の状態を反映し、大塚山の首長を通じてなされた段階、即ちほぼ四世紀初頭までの状態を示し、西方型の分布圏は、その後、四世紀後半までの結果を投影しているとした。したがって、西方型の鏡の全体の分布状態から、京都府大塚山の首長による初期の配布を復原し、「三角縁神獸鏡の配布の初期の段階においては、まずその配布は畿内から北九州の範囲にわたっておこなわれたということである。それを三世紀後半の現象とすれば、三世紀後半における畿内の政治勢力は、西方は福岡県・大分県などの北九州の一部におよんでいたが、東方に対しては著しい伸張をみせていなかったということができる。同範鏡の分布からみれば、やがて畿内勢力圏の東辺は岐阜県・愛知県を含む範囲に達したことが判明する。これはほぼ三〇〇年頃の情勢であろう。ついでその東辺は、一躍して群馬県までひろげられる。これは少なくとも四世紀にはいつてからのことであった」と推論した〔小林行雄「初期大和政権の勢力圏」『史林』四〇一頁の「古墳時代」の「研究」所収〕。

同範鏡の分有関係を追求することによって、初期の大和政権の政治的動向をヴィヴィッドにとらえた小林氏の研究は高く評価されねばならないであろう。それだけに、その成果の一端にふれたこの項が、氏の真意を正しく伝えているかをおそれる。

平地のムラ

初期大和政権の中核をなす畿内、それに深い関りをもったであろうと考えられるこの三島地方では、古墳成立期前後に、どのような状況が展開しつつあったのであろうか。まず、その

ころのいくつかのムラをのぞいてみよう。紅葦山遺跡や塚原遺跡のように、かつて丘の上にあったムラが消えたあと、絶えて丘の上に住居をみることはなかった。平地で何がおこったのであろう。この間のいきさつを川西遺跡にきいてみよう。

弁天山からみえる三島の沃野はひろびろとしている。その脚下にみえるのが川西のムラである。摂津峡のけわしい山間をぬけて、弁天山の丘の裾を削って流れる芥川は、東へ張り出した尾根にさえぎられて東へ曲り、やがてそこから思うさまに東南流した。そのため川西一帯がやや高いこともあって、東の安満のムラのように、水の厄に遭うことはなかった。このムラが誕生したのは、弥生時代中期の初め頃であったと推定されている。富田礫層と名付けられた小石のごろごろした後背地に、低い凹地が東の川筋からいくつもはいりこみ、まるで、掌を東にむけてひろげたような起伏の多い土地であった。はじめはこの凹地の沃土を耕したのだから、やがて、人口の増えるにしたがって、ムラへ流れこむ北の谷筋の水や、西の女瀬川の水流を間接的に利用したのであろう。芥川の低い水流は彼等には無縁であった。その水を田にひいて利用できるのは、ずいぶんのちのことである。低くひろがる尾根のうえには、方形周溝墓がある。黄色い粘土層のところは掘りやすい。しかし、少し草の生え具合の違う小石原は難儀だ。そうしたこともあって、ムラの墓地は、低くのびる丘の背の土くれのあるところに営まれることになった。いま、この起伏は水田の下にかくれてしまっている。実はこうした低い尾根と谷とがいくくんだ複雑な地形と、人の営みを蔽っているのが、現在の川西の水田地帯である。

川西遺跡の調査が始まったのは、皮肉なことに、弁天山古墳群の発掘よりずっとあとのことであった。そ

のころまで、古墳を掘ることはあっても、それらの古墳を支えた平地のムラがどうなっているかということ、あまり問題にされなかったし、また知りようもなかった。川西のムラのあとがいくら知られるようになったのは、問題が異なった関心から提起されたからであった。

この土地には郡家というところが近くにある。かつて丘の上で、藤沢一夫氏にあそびが芥川麿寺だと教えられたことがあった。ひろがる水田の中に、一際茂る樹林は今でもある。たまたま、一九六五(昭和四〇)年春のこと、神郡社の南で社宅建設に伴って土器が大量に出ているときいた。その春の調査は、府立島上高校の生徒たちの営々たる努力をもってしたにもかかわらず、八世紀の遺構のあるらしいことを探査したのみで終った。その後、この遺跡は島上郡衙と芥川麿寺という二つの遺構群の所在確認という作業の中におかれることになる。それゆえ、これから述べる川西遺跡も、その作業の副次的な成果としてあらわれたものであって、弁天山古墳群を支えた中核的ムラの探査や郡衙成立の歴史的背景の究明といった、それ自身の問題として計画的に調査されたものではない。

川西遺跡は広い。東西一キロメートル、南北一・五キロメートルもあろうか。北に小高い丘を負い、東南にむかって低くなる。北の郡家本町のある丘陵部は、辻本充彦君のたゆみない探索の結果、先土器時代や縄文時代の遺物の濃厚な散布をみる事が明らかにになってきた。ここは古くから人が住んだ所である。また、弥生時代になってからは、先述のように、中期以降の痕跡がある。この中期のムラの存立が、指呼の間にある芝谷遺跡や真上・慈願寺の諸遺跡と無縁であったとは思えない。この高槻における農業の開始が、最初安溝に始まったことは事実だが、中期初めには早くもこの川西のムラが誕生した。その時以後、三島東半部は



図120 郡家川西遺跡とその周辺

桧尾川沿岸の安瀾、芥川沿岸の川西の二つの平地のムラを核として展開するようになる。そしてその地域的な連関はこの二〇世紀にも速く及んでいるとみられる。

さて、前置きが長くなった。川西一帯の話に戻ろう。前述のように、起伏の多いこの地域に、古墳成立の直前のムラが認められるけれども、さほど大きなものではない。北は阿久刀神社から、南は西国街道までの南北約七〇メートル、東は芥川沿岸から西へ約四〇メートルぐらいの範囲であろう。ムラの南縁に方形周溝墓や土壇墓があるのは、このムラの一般成員の共同墓地であろう。弥生時代後期には、この範囲のなかほどに、一辺約八メートル、深さ約四五センチメートルの方形堅穴住居をはじめ、同期の住居跡がいくつもあった〔大阪府教委、嶋上邪衛、その住居は四本柱で屋根を支え、中央に炉がある。こうした住居が、どのような機能をもったものか明

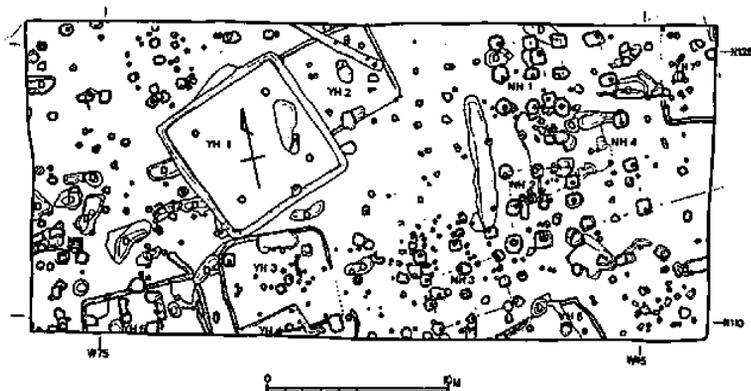


図121 郡家川西遺跡の方形竪穴住居

らかでない。ところで、その次の段階になると、一辺約二メートルの小さい竪穴住居が数基あつまった状態であらわれる。集落を構成する住居が、このような小竪穴のみに限られているわけではない。しかし、そのあり方は、大きい竪穴住居に付属するようなものではなく、小さいなりに一つの群れを構成するところに特色がみられる。こうした住居群が集落内での階層差を示すものかどうか、今後検討すべき課題である。

このころ、さかんに集落の内部や外縁に、幅一メートル前後の浅い溝を掘っている。その溝の方向は、あるものでは等高線に平行し、あるものは直行するかのようである。広い範囲にわたって全面的な調査をおこなったわけではないので、確実なことは判らない。しかし、安満遺跡の東辺〔高槻市教育委員会「安満遺跡発掘調査報告書」〕で調査したところでは、古墳時代前期の段階には、幅約二メートル、深さ五〇センチメートルの溝と、幅約四メートル、深さ約一メートルの二本の溝が直交し、あたかも方格の地割があったようにみえる。この水路は検尾川の水を田にひくためのものであろう。それらは、後の条里の方向とほぼ四五度ふれている。

溝の断面は逆台形を呈したり、U字形であったり、一定していない。これより約一キロメートル西、安満遺跡の西辺では、六世紀になるともっとりっぱな溝がつくられるが、その方向も、条里の方向と四五度ほどふれているのを見ると、古墳時代前期の水路を踏襲したのかもしれない。前期以降、局地的な方格の地割がおこなわれた可能性は十分にある。

川西遺跡や上牧遺跡〔高槻市教委「上牧遺跡発掘調査報告」〕では、古墳時代前期の井戸が見つかっている。上牧遺跡の井戸は、直径一・六メートルの円形素掘りの井戸である。深さ一・三メートルで灰色砂層に達している。杵材は見つからなかったが、井戸の内壁と埋土の間に黄灰色砂質粘土があったところを見ると、ある種の杵材があったかとも推定される。この井戸は、一辺が約三メートルの方形堅穴住居の南約六メートルのところに掘られたもので、その住居の西にも一辺約三・五メートルの方形堅穴住居が並列し、あたかも二基の住居のための井戸のようにも解される。

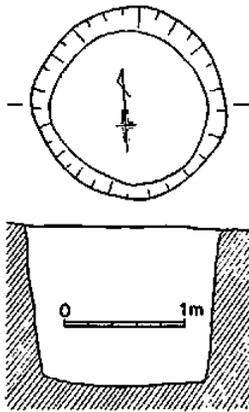


図122 上牧遺跡の井戸

古墳時代前期のムラと推定される三島地方の主要な遺跡を東から順にあげてみると、上牧・安満・川西・太田・郡といった具合に、北の山裾に沿って、ほぼ二キロメートルの間隔でならんでいる。この間には、真上遺跡のように、さらにいくつかムラがあるだろうが、これらを結ぶ道が、やがて山陽道となり、西国街道になったのであろう。それぞれムラの南には中小の河川の水流を利用することによって灌漑可能な低地がひろがっている。さらにそのむこうには、茫

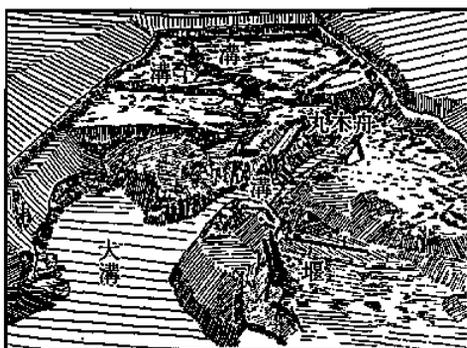


図123 東奈良遺跡の大溝と丸木船と堰

漠たる淀川の氾濫原がある。もはや人々は、弥生時代のように、丘の上へ移り住むことはしなくなった。それよりもむしろ低地の可耕地を求めて移り住む傾向がある。上牧のムラはその一例であろう。だが、淀川の氾濫原には手が出なかつたらしい。大部分のムラは依然として、前代以来のムラの場所を踏襲している。当時の水田の南限は、現在の国道一七一号線の通るラインを南へ越えた程度であろう。

郡遺跡の南、約二キロメートルのところにある東奈良遺跡では、幅一〇メートル、深さ三メートルの二段掘りの大溝が、長さ二〇〇メートル以上にわたって判明しているが、その全長はさらに延びると予想されて

いる。また、ある大溝には、幅七五センチメートル、長さ三・五メ

ートル余の丸木舟の残骸があつた。ムラの外辺に掘られた大溝は、

やがて末端で茨木川に合し、淀川に通ずるのである。ここではは

やくも人工的な運河の掘さくが始まっていたといえよう。〔東奈良遺跡調査会「東

奈良遺跡現地説

明金資料」他〕。大阪府南部にある羽曳野丘陵の東縁から北縁にかけて、長大な溝

状の遺構がある。この謎の大溝渠は、一説では仁徳紀一四年の「感

致大溝」に比定されるものだが、発掘調査の結果、四世紀末から五

世紀に開掘された可能性のあることが指摘されている。〔大阪府教委「古

市大溝渠発掘調査概〕。この地域は著名な古市古墳群のあるところである。大溝は白

鳥陵（日本武尊陵）の西にある長池の北縁から北走する南部西支溝渠

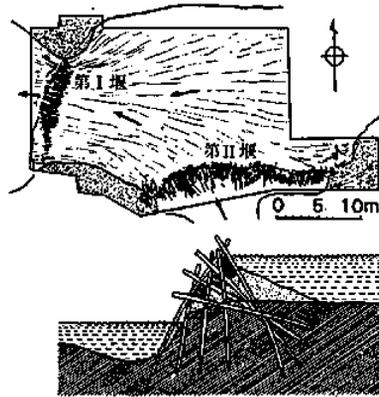


図124 古照遺跡の堰 (愛媛県松山市)

古墳の造営や水田の開発と密接なつながりをもつて、おこなわれるようになったことを示している〔原口正三「土木技術文化史」〕。

古墳時代前期になると、溝や小河川の水流に杭を打ちこみ、横木を組んで堰や梁をつくった。愛媛県古照遺跡では、川の合流点に近く二つの堰を設けていた〔古照遺跡調査団「古照遺跡報告」〕。一つは全長約一三メートル、他は約二四メートル。まず下流側から上流にむけて斜材を約五〇センチメートル間隔で打ちこみ、斜材上に横木をおき、それをとめる杭を密に打つ。隙間にはオギ・粘土・礫をつめた。この手順をくり返して、二段・三段と上方へ高くしてゆく。一つの堰には約五五〇本、他の堰には約六五〇本もの杭が用いられていたというから、一見簡単にみえる堰でも、その構築には多大の労力を費したであろう。類似の遺構は、豊中

と、その北で合する南部東支溝渠、それらが合してさらに北走する中部支溝渠（八二〇メートル）、さらに西へ屈折して仲京陵の南沿いに走る北部支溝渠（五九〇メートル）にわかれる。北部支溝渠はさらに西北へのびるともいわれているから、その総延長は二キロメートルをはるかに上回るであろう。幅員約二〇メートルの大溝渠の兩岸には堤を築いてある。この大溝渠建設の意図はなお明らかでないが、おそらく巨大古墳の造営に際しての資材運搬や灌漑の目的で、掘開された運河なのであろう。それは東奈良遺跡の大溝でみた土木の工事が一層大規模になり、

市利倉遺跡や八尾市中田遺跡でも見つかっている。また、奈良県纏向遺跡（石野博信「奈良県纏向遺跡の調査」『古代学研究』六五）では、幅六メートル余の溝の兩岸に、長さ一・二メートル以上の矢板を密に打ちこんでつくった集水マス様の構造物さえあった。古墳時代前期には、すでにさまざまな堰の構築法があり、小河川の水位を人為的に高めて、他へ分水する技術が現今とかわらない程に発達していたことが知られる。分水や集水の施設が各地にみられる背景には、当時、急速に拡大する水田、とくに乾田の大量な出現があったのであろう。この三島では、そうした遺構は見つかっていないけれど、水田の経営がいつそう高度になりつつあったことは推察に難くない。

三島の弁天山C1号墳がつけられたころ、茨木市宿久庄や福井の丘の上にも同じような墓がつけられた。それらは佐保川と勝尾寺川の合流点に近い。この古墳群と弁天山の古墳群は三島平野を東西に両分し、のちに島上・島下と呼ばれ、高槻市と茨木市の行政的地域の原型をなしているようにみえる。しかし、これをもって、ただちに古墳成立期の地域的結合の範囲が、ほぼそうした大きさであったと解するわけにはいかない。もし二つの地域をとりあげるなら、弥生時代こそ、それにふさわしいであろう。銅鐸が、東は天神山に、西は吹田市別所センプにあったのと二つの地域は対応している。しかも、東の地域では、安満と川西の二つ、西の地域では郡と東奈良といった具合に、それぞれ中核となる二つのムラがある。しかも、銅鐸が埋納された丘と、初期の王墓が出現する丘は両地域とも異なっている。もし、古墳の被葬者の出自を、その近傍のムラに結びつけてよいなら、弁天山古墳群の被葬者は、丘麓の川西のムラの首長であろう。銅鐸を用いる祭祀が、具体的にどのような祭祀だったかはわからないけれども、この地域に銅鐸のあら

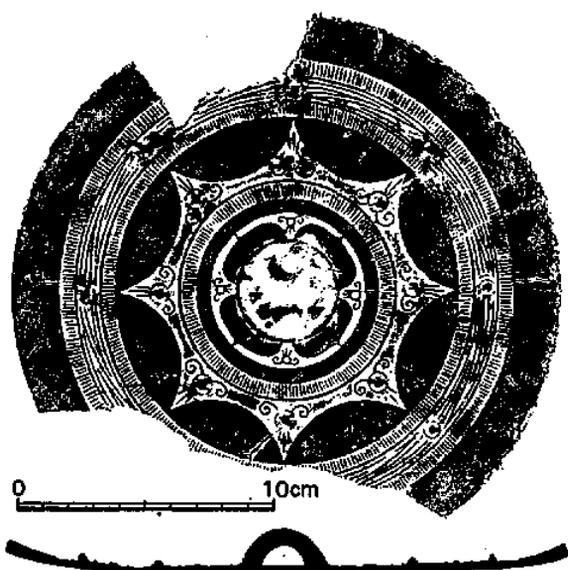


図125 慈願寺山古墳の内行花文鏡

たのであろう。そういう状況のもとで、血縁的結合や擬制的結合の象徴として命脈を維持してきた銅鐸の祭祀は、新しい政治的権威による保証という新たなイデオロギーとその賜与物が到来したとき、色あせたものになった。倭の女王が中国の皇帝に対しておこなったような、朝貢による権威の賜与という国際的な首長間の政治的結合形式は、倭王と地方首長の間でも国内版としておこなわれたのであった。いまやそうした朝貢

られる意味を既述のように解するなら、その祭祀は、母集団の主宰によっておこなわれた祭祀であった可能性が大きい。もしそうなら、弥生時代後期に突線鈕四式の銅鐸を入手して、銅鐸祭祀を保守していた集団は、安満のムラであったのではなからうか。しかし、安満のムラの水田は、依然泥湿のところであって、生産性の低いところである。しかも安満のムラは、後期後半には東・西・北の小集団に分立していた形跡がある。それに比べて、川西のムラは女瀬川の小水流によって、一躍乾田化しやすい条件にある。そこから、二つのムラの経済的・社会的格差は、弥生後期の段階に大きくなりはじめてい

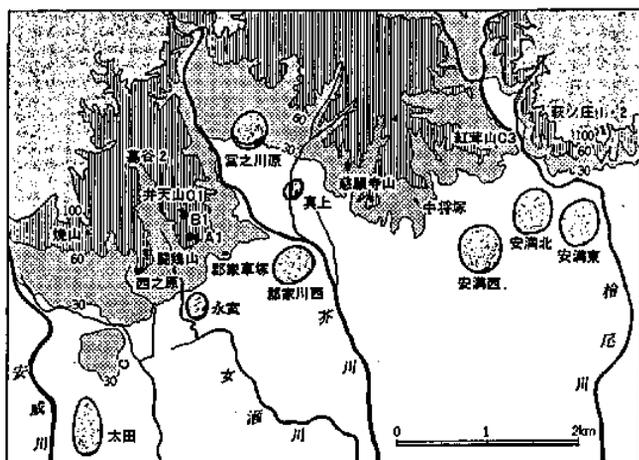


図126 古墳群とムラ

と賜物によって結合する形式が流入し、一般化し始めたとき、価値高き銅鏡や碧玉製腕飾類を入手し得る経済的力は決定的な差を生んだ。しかも、司祭者であると同時に、現実の政治的支配者でもあった首長は、ム

ラの剰余物を、そして人間さえ、貢の品々に加え得る力をもつにいたっていたと解される。それはまた自己の支配する三島の小首長たちに、この新たな結合形式を強要することでもあったのである。だが、この結合形式は安定したも

のではなかったらしい。その最大の欠陥は、絶えず朝貢して紐帯を強化し、倭王の新立のたびに、その権威の保証を求めなければならないところにあった。

やがて四世紀末から五世紀の前半にかけて、三島の山麓部のムラむらでも、新たな装いをこらした首長が、丘の上に墓をつくり、彼の権威を誇示しはじめた。それは、初期の王たちの模倣であり、かつて彼によって保証されたささやかな首長権の誇示であった。安満東のムラの首長は萩ノ庄の丘に、安満北の首長は紅葺山に、安満西の首長は天神山に、そして低い分水界をこえた真上のムラの首長は慈願寺山に、服部・宮之川原の首長は西の墓ヶ谷に、氷室の首

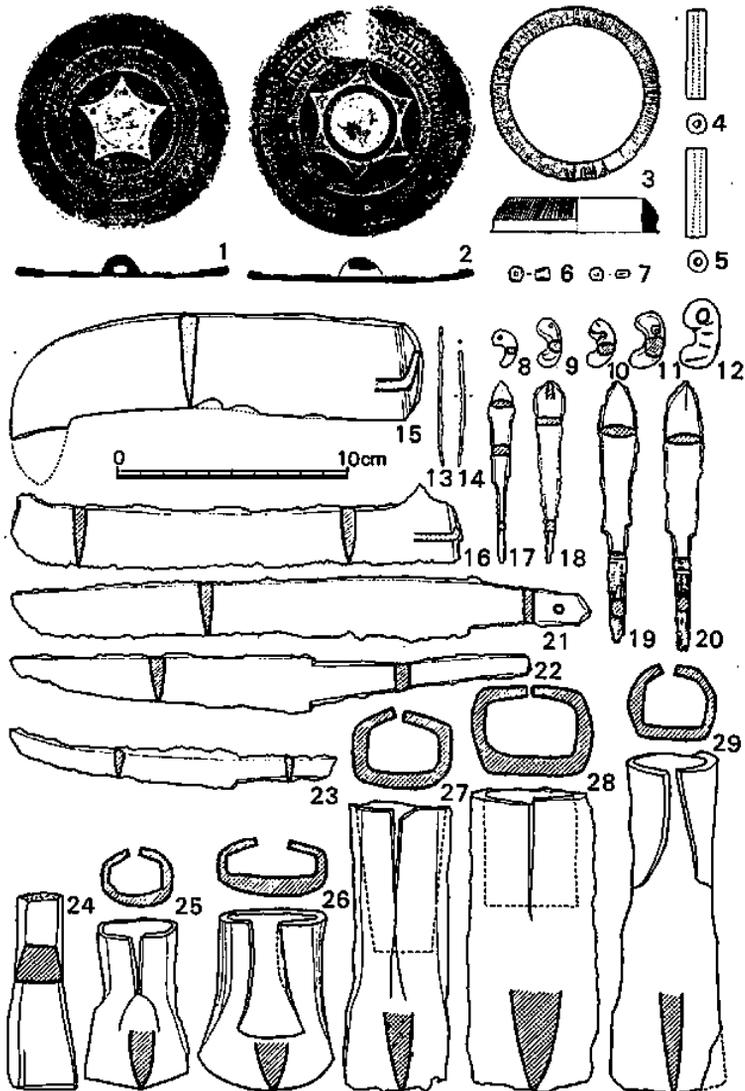


図127 紅苜山C3号墳の遺物 (1・2鏡, 3石劍, 4・5管玉, 6ガラス玉, 7小玉(滑石製), 8~12勾玉, 13・14鉄針, 15鉄劍, 16鉄鋌, 17~20鉄鉄, 21鉄刀, 22・23鉄刀子, 24砥石, 25~29鉄竿)

I 考古学からみた原始・古代の高槻

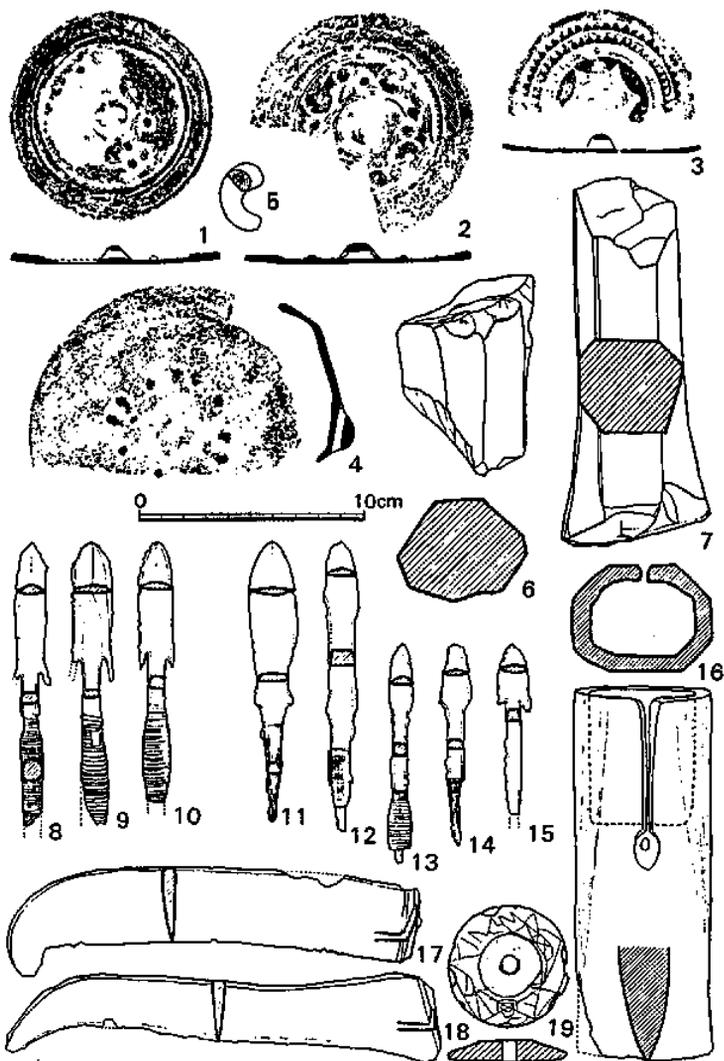


図128 奥坂古墳群(1~7)と紅葦山古墳群(8~19)の遺物(1~4鏡, 5勾玉, 6・7磁石, 8~15鉄鏃, 16鉄斧, 17~18鉄鏃, 19紡錘車(碧玉製)(8~10紅葦山20号土城墓, 11~16・19紅葦山C8号墳, 17紅葦山C6号墳, 18紅葦山C11号墳)

長は鬮鷄山にといった具合に、それぞれ平地のムラと対応して首長墓がつくられていった。それらの古墳は
いづれも小規模であり、副葬品も初期のものに比べれば見劣りがする。それは被葬者の依ってたつ経済的政
治的基盤が、小規模であるからであらう。

第二節 大王の世紀

尾根にな 弁天山C1号墳のその後はどうなったのであろうか。その後継者に該当するとみられる人物
らぶ墓の埋葬施設を、前方部でみてみよう〔原口正三・西谷正「弁天山C1号墳」南北約六メートル、東西
約二・六メートル、深さ約七〇センチメートルの墓壇を墳丘主軸に直交させて掘り、水平な墳底は地上上に
ある。墳底中央やや東寄りに、長さ約五メートル、幅約一メートルの範囲に、断面台形になるように粘土を

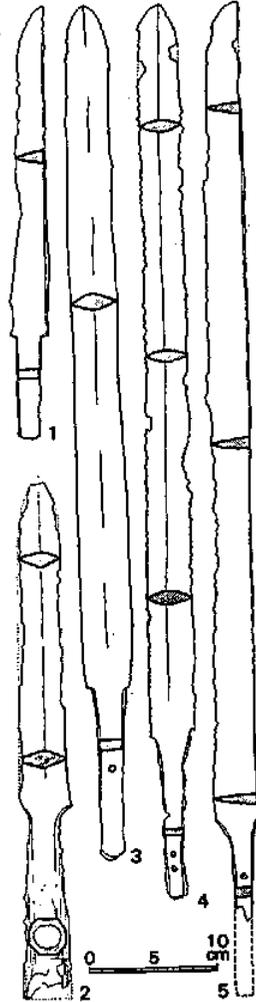


図129 鉄剣(3・4)、鉄刀
(1・5)、鉄矛(2)[1
・5塚原G2号墳, 2天
神山, 3紅葺山C8号墳,
4紅葺山C3号墳]

敷く。この上に、長さ約四・五メートル、径約四〇〜五〇センチメートルの割竹形木棺をおく。棺には両端から内へ三〇センチメートル入ったところに、中仕切板があったらしい。棺の横転を防ぐため、棺床との空隙に粘土をつめ、その外周に、ベラスを敷き、再度、粘土をもって棺全体を被覆する。かくして、墓壙を土で埋めた。棺内には赤色顔料が一面にひろがり、中央近くに碧玉製筒形石製品一、ガラス小玉六があり、棺外北側には土師器の小形丸底埴二、壺一が一括しておかれ、被覆粘土中で鉄片二を検出した。また、壙内ベラス中に、埴輪片が混入していた。この埴輪は、後円部の被葬者の埋葬儀礼のあった後に、この前方部の埋葬があったことを示している。堅穴式石室をつくらず、長い割竹形木棺を粘土で被覆する簡単な葬法は、当時一般化した葬法である。また、その棺内の副葬品をみると、後円部被葬者と同じように筒形石製品をもちながら、他はガラス小玉のみである。このあと、後円部の石室に重複してつくられた一基の埋葬施設もまた、同じような構造のものであった。この尾根の東端の一基になると、粘土の被覆さえあったか疑わしい。また、B1号墳やA1号墳でも、そこから東へのびた尾根上に、類縁者たちの墓がつぎつぎに営まれていったけれども、同じような構造の簡素なものであった。あるものでは夫婦とも思える二棺一組が併置されていた。まさに、このあり方は、かつて丘の頂きに選地した首長につらなる一族の系譜をあらわしているかのようである。いまや、かつての首長が権威を誇示した姿はみられない。それは「墓」と呼ぶにふさわしいであろう。この変化は、遅かれ早かれ、さきにあげたムラむらの首長層にもあらわれる。ただ、そういう段階になっても、依然として、ムラの共同墓地とは区別された場所に墓地を定め、墓を営みつつつづけたところに、階級的な社会の支配層としての姿がある。

茶臼山古墳

しかも、こうした変化が三島の首長たちのうえにあらわれてきつつあったとき、大和や河内の中核部では、巨大な大王の陵墓が、彼の権力と富の象徴として、異様なまでの姿をとりつ

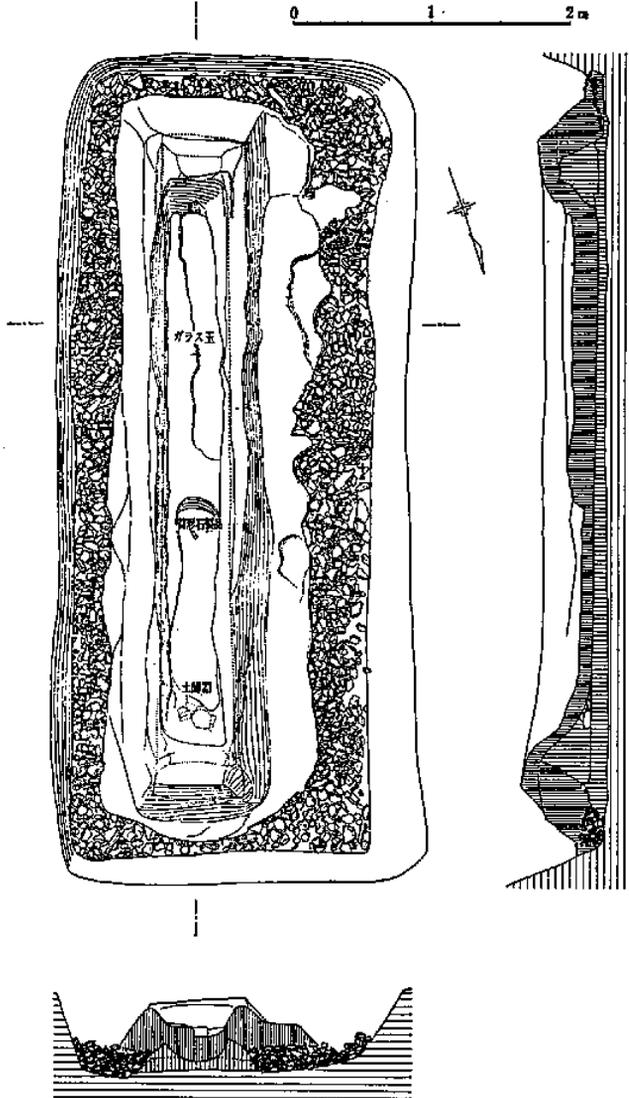


図130 弁天山C 1号墳の前方部粘土椁

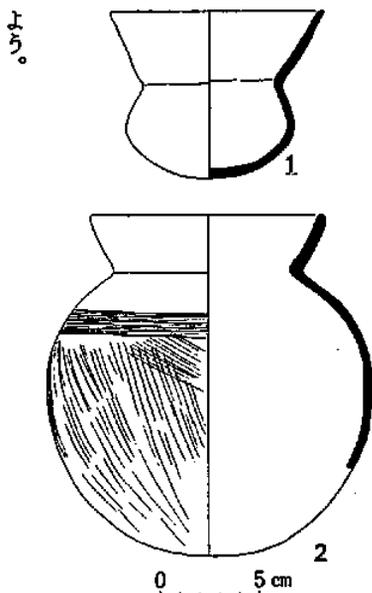


図131 弁天山C1号墳前
方部粘土槌の土師器

よう。

茶臼山古墳の墳丘は、西北から東南に主軸をおき、その規模は全長二六六メートル、後円部径一三八メートル、その高さ一九・二メートル、前方部の幅一四七メートル、その高さ一九・八メートル、くびれ部に造り出しがある。この墳丘をとりまく幅三〇メートル内外の濠と、さらに南半部は堤を距てて幅狭い濠がコ字形に囲み、部分的に二重濠になっている。また後円部の外方には、濠を距てて、数基の古墳がとりまくように配置されている。これまで三島の首長墓は濠をもたず、尾根の上に承踏的に配列する形式をとってきた。そこに、突如、巨大な墳丘と、濠をめぐらし堤を築いて、外界と厳しく隔絶する形式が登場した。この形式は三島で生み出されたものではない。巨大な墳丘と濠を距てて配置された諸墳は、内廷を構成する従臣たちの墓なのか、それとも主墳の栄光にあやかろうとする小首長の墓なのか。従属的な関係にある人物が、主丘

つあった。辛卯（三九二）年の朝鮮半島への国際的軍事行動が、この三島の首長たちにどれほどの影響を与えたかは明らかではない。ただ、河内の允恭陵と形態の類似する茶臼山古墳（現藤体陵）が、茨木市高田の台地上に出現したのを五世紀中頃とするなら、この周濠をそなえた巨墳の築造は、三島にとって、一つの画期とみることができ

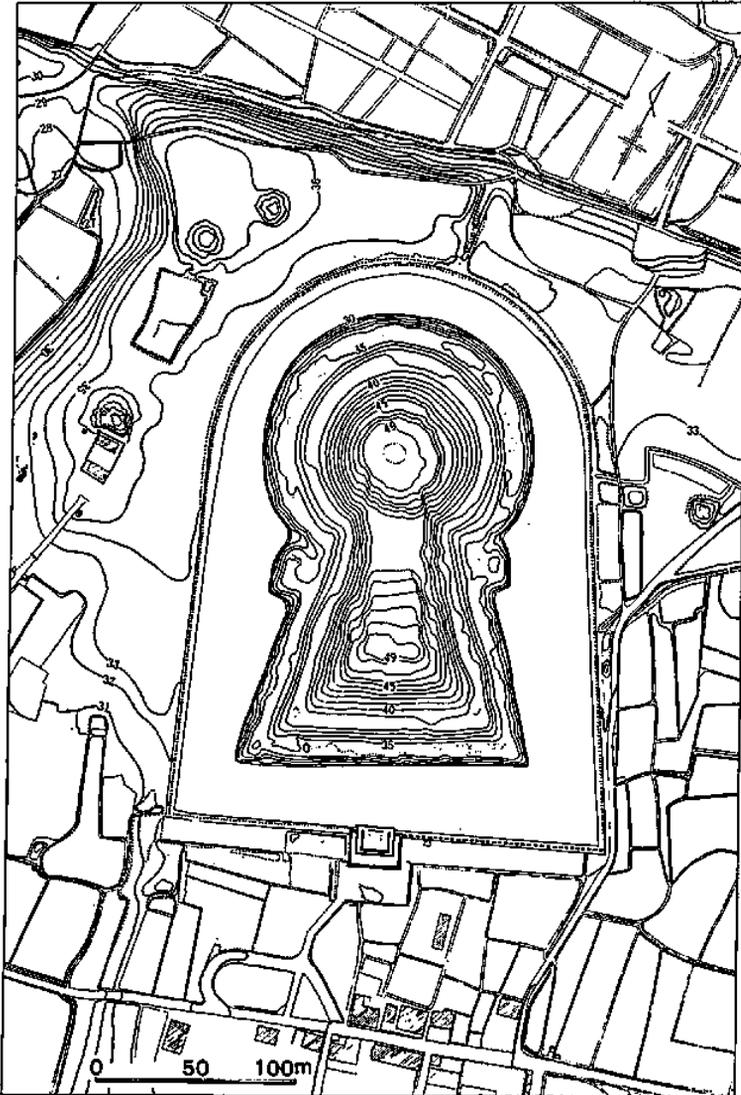


図132 茶白山古墳 (茨木市)

をとりまく濠の中に埋葬される例は、紅茸山や狐塚古墳群にもみられる。この一群の古墳群の被葬者たちの本拠はどこにあるのだろうか。三島の西部では、初期の王墓がつくられたあと、その系累を示す墓は影が薄い。そのことと関係があるのだろうか。この主墳を茶臼山と呼ぶのは、前方後円の形態をさしての呼称であろうが、その小字を「吉志部山」というのは、いかにも歴史的な縁由があるようにみえる【^三福里^二「吉土」について^一】。

墓谷古墳群

弁天山古墳群のある丘は北へのびている。C1号墳から北へ約三〇〇メートルを距てたところに、東へのびる尾根があり、その基部に一基の円墳があった。すでにゴルフ場になったため、いまはない。直径約三〇メートル、高さ約五メートルの規模をもつこの古墳は、本来ほとんど盛土をせず、地山を削り整えて墳丘としたと考えられている。内部主体は、長さ約四メートル、幅約一メートルの土壇を東西に掘り、壇底中央に断面U字形の溝を掘って、そこに割竹形木棺をすえてあった。木棺は長さ三・七メートル、幅約五〇センチメートルと推定した。棺の東端に近く、鉄製の斧・鎌・ノミ・鉈・刀子などがあり、中央部や西寄りに鉄剣各一をそえ、西端近くに鉄製鈍一との間に滑石製小玉があった。棺底は東側が高いので、被葬者の頭は東にあつたと推定されている。

この古墳のすぐ西北に一基の前方後方墳があつた。この古墳もすでない。南北方向に走る丘の脊梁部を利用してつくつた古墳で、北側に後方部、南側に前方部がある。全長約四〇メートルのこの古墳は、もし三段に築成されたとすれば、後方部は基底の一边が約三メートルの正方形を呈するとみられるが、実際には後方部背後の丘陵を削ることをかなり省略している。後方部中段の下辺は一边約二・二メートルの正方形で、下段の上縁との間に幅約一・五メートルの平坦部がめぐる。この平坦部より、前方部側を除く三面は、それ

それ一つの斜面となつて、後方部の頂部に達する。墳頂部は約一〇メートル四方の正方形の平坦面である。前方部の頂は、後方頂部より約一・三メートル低く、その上面は長さ約一〇メートル、幅約七メートルの方形をなした平坦面である。この下方の上段斜面の基底部は長さ約一〇メートル、幅約一四・四メートル、最下段の基底部の長さは約一二メートル、幅は約二四メートル(推定)となる。後方部をめぐる幅約一・五メートルの平坦面は、前方部にもつづいている。局部的に残っている葦石面の基石列をみると、平面的には後方部中段下縁の延長線上に、前方部下段下縁があつて、墳丘築成に際して、平面形の正確な設計がおこなわれたことを推定し得る。また、葦石面には、作業区分を示唆する界線が認められる。

後方頂部には三基の木棺(a・b・cと呼ぶ)が、それぞれ設けた土壇内に直葬されていたが、いずれも、その長軸は墳丘の長軸に平行していた。

三次の埋葬は次のように復原できよう。まず、後方頂部中央に、長さ約六メートル、幅約二・八メートル、深さ約四〇センチメートルの墓壇を掘り、壇底には、長さ約五メートル、幅約八〇センチメートル、深さ約一五センチメートルを掘りさげ、そこに長さ約二・八メートルの組合式木棺(ホ)を納めた。その際、棺は後の埋葬を予定したか、やや東に片寄っている。棺端には厚板をはめてあつたらしい。この両小口板の外側の凹みは、それぞれ小さい空間となり、副葬品を納めた。棺内には鉄刀子一のみであった。

つぎに、さきの棺にそわせるように、その西側に墓壇を掘った。長さ約四・八メートル、幅約一・五メートルの墓壇内に、長さ約三・七メートル、幅五〇(六〇)センチメートルの棺(b)を納め、南端には厚さ約一〇センチメートルの板をあて、その南を副室とした。棺底中央に針状鉄製品と滑石製小玉があつた。

Ⅱ 考古学からみた原始・古代の高槻

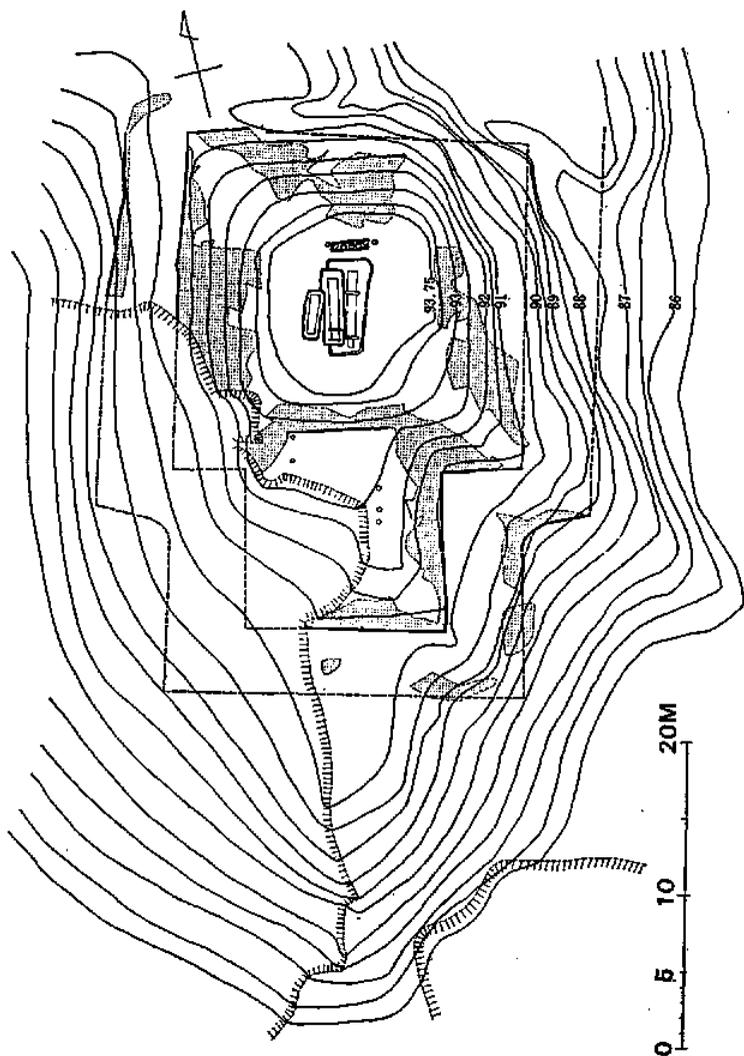


図133 基谷2号墳の墳丘

さらに、bの西にそって、長さ約三・三メートル、幅約一メートル、深さ約二五センチメートルの墓墳を掘り、その中に、長さ二・六メートル、幅五〇〜六〇センチメートルの割竹形木棺(c)を納めた。棺内北側に針状鉄製品があり、棺外側には鉄鍍があった。

第一次の埋葬時に、後円部や前方部に埴輪(家・甲・鳥など)がおかれたが、その後の埋葬時には、棺の北側に溝を掘って、新たに円筒埴輪をならべた。また、須恵器・土師器もみられる。

前方後方墳の北約一〇〇メートルに、直径約三〇メートル、高さ約五メートルの円墳があった。斜面は葎石で蔽つてある。埴頂部には、ほぼ東西に長軸をおく組合式箱形木棺二基が、北と南にあった。いずれも東側が破壊されているので、全長は明らかでない。南の棺内からは鉄剣一、北の棺では遺物を認めなかった。埴頂部には円筒埴輪等があったらしい。

いま述べた円墳の北に、南向きの前方後円墳一基があった。全長約四五メートル、後円部径約三〇メートル、その高さ約四メートル、前方部の幅約一五メートル、その高さ約三メートルを測る。東側や埴頂部が著しく崩れ、部分的に葎石や埴輪(家・盾・蓋・鳥・円筒)の配列が遺存した。主体部は破壊されていたが、直葬した木棺の痕跡とみられる赤色顔料が長方形の範囲で認められた。遺物はほとんど破壊され、原位置を遊離していたが、ガラス玉や鉄製の刀・鎌・冑・甲・馬具・ノミ・斧などがある。

以上四基の古墳については、前方後方墳を最も古く、前方後円墳を最も新しく推定できる。前方後方墳の年代はほぼ五世紀中頃、前方後円墳の年代は六世紀前半と推定されている〔大阪府教委「升天」
山古墳群の調査〕。この古墳の被葬者は、この東方にある服部宮之川原の首長たちであろう。服部は芥川東岸の盆地状のところであるが、服

部の地名に仮託して、渡来人の居住地のように解されている。けれどもそれは、この地域の北方にある古墳時代後期の塚脇古墳群の出現の時期をもって、それにあてての方が適切であろう。服部に人が住み、このまとまりの土地を耕しはじめたのは、弥生時代に遡るかもしれない。南の真上に近く、ちょうど名神高速道路の通っているあたりには、弥生時代後期の遺跡がある。また、この地域の東の安岡寺や浦堂には、古い年代を与えられそうな古墳があるというから、早くからこの土地を耕地化する動きはあったのだろう。ところで宮之川原のムラのあとは、詳細にわかっているわけではない。付近に住宅がつくられた折に排水路用の溝を掘ったとき、土師器や須恵器などがみつかったにすぎない。しかし、土器の年代は、西の基ヶ谷古墳群のそれとよく照応し、地形的にも西を望める位置にある。古墳群とムラが一組となるよい例である。

埴輪の窯跡

高槻の西に「土室」というところがある。この地域を「ハムロ」と呼ぶのには、わけがある。土を「ハニ」といったのは、遠い昔のことであるが、埴輪や埴生の宿の埴といえは、ハニが粘土のことだということはわかる。土室の村の北にある谷は、古墳時代の埴輪をつくったところであった。八世紀につくられた日本書紀の、欽明天皇二十三年冬十一月の条に、

冬十一月に、新羅、使を遣して、獻り、并て調賦を貢る。使人、悉に國家の、新羅が任那を滅すに憤りたまふを知りて、敢へて罷らむと請さず。刑戮に致らむことを恐りて、本土に歸らず。例、百姓に同じ。今の摂津国の三輪郡の埴の、新羅人の先祖なり。

という記事がある。そして、この記事に「今」とあるのは、淀川北岸を三島郡と呼んでいたころをいうのであろう。土室という地名は、この埴廬と関係があるのだろう。でも、その人たちが住みつくよりもっと前か

ら、この近くの谷間で埴輪をつくっていた人たちがいたことがわかっている。

新池のある谷は、幅約一〇〇メートルの狭い谷であるが、中ノ池・上ノ池といくつもの池が段々になつてつらなっている。新池の水がひくと、東の岸に埴輪の破片や灰の層があらわれる。このあたりを調べた免山篤氏は、近くの崖に、直径約六五センチメートルの円筒形の焼土層が、約四五度の傾斜で、池にむかつてその断面をみせ、その中に円筒埴輪一本が埋めこまれた状態であったことを報告している〔免山篤「大阪府高槻市「土室の埴輪窯址」〔古代学研究〕六二〕。そして、その状況や地形からみて、埴輪を焼いた窯が「登り窯」の構造で、トンネル式のものだったろうといっている。しかも、灰原の裾に石で築いた壇があつて、窯の構造物かもしれないということもつけ加えている。たいてい、埴輪の窯はいくつも並んでいるから、この谷の斜面を利用した窯は、新池以外のところにも及んでいるかもしれない。

埴輪は日常につかう什器と違つて、古墳のうえにたてならべるように、特殊な役割をもつた器物である。粘土紐を捲きあげてつくる方法は、土器のつくり方と似ている。だから、埴輪の製法は、土器の製法を母胎にしている。つくり方だけではない。埴輪のつかい方も土器と関係がある。弥生時代の墓には、死者に土器を置いたり、墓のまわりに土器を供えたりした。土器には供物を入れたものもあつただろう。方形周溝墓と呼ばれる墓では、溝のなかにお供えの土器が埋まつている。そこで、これらの土器と埴輪を結びつけて埴輪の起源を説くことになる。なるほど、大筋はそうかもしれない。しかし、弥生時代の墓にあるのは埴輪とは呼ばない。埴輪というのは、葬礼のためにつくられた古墳時代の素焼の土製品である。

埴輪の起源について、かつて近藤義郎・春成秀爾の両氏は、吉備地方の弥生時代後期の特殊壺形・器台形

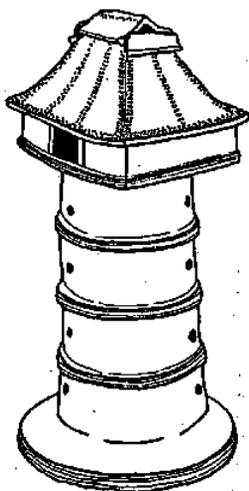


図134 女男岩遺跡の
台付壺形土器

土器から壺形埴輪の成立を説き、その成立の背景に弥生時代の飲食物供献の祭祀から、首長葬送の祭祀へ転化する際に、象徴的形象化として埴輪があらわれることを指摘した〔近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』三三三〕。この論旨は、畿内諸勢力が吉備地方にはじまった円筒埴輪と壺形土器の葬祭形式を受け入れ、盛行させる際に、壺形埴輪がつくりだされたと推論したのである。このような推論の傍には、畿内の弥生時代後期の壺や器台が矮小であるのに対し、吉備地方では「特殊」と呼び得るような壺や器台の発達が見られること、畿内の前期古墳の埴輪に、吉備地方にみるような「特殊」な壺や器台との連関を示すものがみられないことなどが考慮されていた。しかし、その後、奈良県の箸基はしもとと称する古墳の埴輪に、阿氏があげられた岡山県都月つづもと一号古墳と同様の埴輪があることが知られるにいたって、一概に吉備地方をもって、埴輪の発生地とする説を疑う論さえ生じた。円筒埴輪や壺形埴輪の発生が吉備地方にあると認めるにしても、その他の埴輪について、なお未解決の問題が横たわっている。

形象埴輪のうち、早くあらわれる家形埴輪の先駆形態としては、弥生時代後期末とされる岡山県女男岩の台付家形土器（高さ約五〇センチメートル）や鳥取県大鼻の台付家形壺などをあげることができよう。しかし、他面では、埴輪の発生が、本来墳丘上に奉獻される器物を土にうつしたものであると解すなら、前期古墳の墳丘上に埴輪の認められないものについて、墳丘表飾の問題を考えなければなら

ないであろう。

例えば、弁天山C1号墳の埴輪をみると、後円部前面に特別な考慮をはらってつくられた幅約七・八メートルの緩斜面には、両側にそれぞれ一列に並べられた埴輪列があり、そのうちには、長大な楕円形の特異な埴輪がその長軸を配列方向にそろえて据えてあった。この埴輪は直立した平板な台形に近い立面形をなし、胴部には三角形や円形の透孔や細く突出した凸帯がめぐっている。他にも一種の直弧文をもって飾り、奈良県宮山古墳や京都府庵寺山古墳の靱形埴輪（びんがた）の文様と関連するものがある。

このような長大な楕円形埴輪の破片は、他の箇所からもみつかっている。文様がつけられているところをみると、それ自体が装飾的機能を帯びた器物かもしれない。だから、同じ長楕円形の埴輪でも、盾形埴輪や靱形埴輪などの背後にみられるような単なる支柱の部分とは同一にあつかえないものである。だとすると、この埴輪はいかなる機能をもっているのだろうか。

この長楕円形の埴輪は、それ自体で完結するものであり、脚部がひらいて安定するようにつくられ、上端はわずかに外反する。あるものでは、最上段の凸帯より上部が立ちあがり、その凸帯より下方に大きくひらくなど、いわゆる器台としての特徴をそなえている。

つまり、この埴輪自身が器財埴輪ではなくて、これを台として、この上に器物を載せたり、たてかけたと推定できる。盾形や靱形の埴輪の最初は、こうした台に現物をたてかけたものであったろう。それがのちには、奉獻の仮器として土にうつされ、器物と台とが接合してつくられるようになったと推測する。この推測を延長すれば、埴輪の認められない初期の古墳では、奉獻する器物をそのまま墳丘上に配列してあった

I 考古学からみた原始・古代の高槻

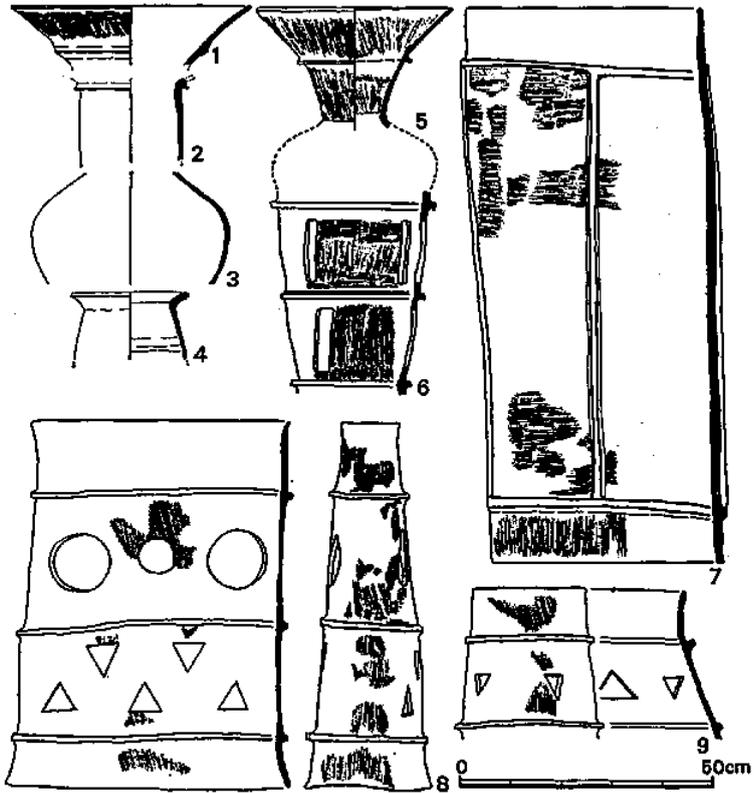


図135 弁天山古墳群の埴輪 (1~3 A1号墳, 5~7 C1号墳)

可能性が考えられる。

また、弁天山C1号墳のさきの斜面では、左右の埴輪列にはさまれた斜面の中央(主軸上)に、特大の円筒埴輪が二個たててあった。下方の一個を復原したところ、上と下にそれぞれ一条の凸帯がめぐり、それらをつなぐ縦の凸帯が円筒を四分する位置につけてあった。横帯間の刷毛目のつけ方も特異であって、四分中の三は横方向なのに、一のみは縦方向である。この形態のよつてくるところを求めると、特殊器台の類に求め得るであろう。しかも、この古墳では、すでに壺形埴輪は、壺と台との結合した形態をもち、円筒埴輪は定型化している。

C1号墳以前の段階は、A1号墳でみるように、壺と台との結合した形態をもちながら、壺の体部全形をあらわしている。B1号墳に埴輪のないところをみると、壺と台を結合して一体化した壺形埴輪の創出は、A1号墳とB1号墳の間の時期であったと推定できよう。そして、やや遅れて、他の器物を土にうつした器財埴輪がつくられるようになったらしい。古墳に奉獻される器物のうちで、壺がはやく台と一体化したのは、壺自体が土製品であったことがその最大の理由であったろうが、壺形埴輪がよく実用の壺の形態的特徴をそなえているところをみると、土器の製作と埴輪の製作が、同一の作り手によってなされたことにもよるのである。

もし、この推測が正しいなら、前期の古墳の埴輪は、土師器の製作者たちによって、同様の技法をもってつくられたとみてよいであろう。一つのムラの後背丘陵に、一、二基の首長墓をつくった段階までは、埴輪の窯が見出せないのは、土師器の窯が見出せないのと同じ現象であって、埴輪もまたムラの自給的土器生産

の中でつくられていたからかもしれない。

先年、著名な古市古墳群の中央に位置する羽曳野市の菅田白鳥遺跡で、五世紀と推定される埴輪の窯が調査された。窯は北へのびた低い丘陵の西斜面と東斜面につくられている。西斜面にある一基は、地山を穿って窯体を築いたもので、厚さ三・五センチメートルの側壁から一連のベースをもち、内部に埴輪片を敷きつめたベースが何枚かあるらしい。東斜面では、九基の窯が調査されたが、そのうち、東端の一号窯はほぼ完存し、その規模を知ることができる。窯は長さ六・七五メートル、幅一・五六メートル、奥壁の部分で約四〇センチメートル近くまで幅が狭くなり、その部分に煙道を取りつけたと推定されている。二号窯は焼成部に七枚以上の床面があり、約一〇度前後傾斜し、燃焼部と考えられる部分は、傾斜が緩やかで、横断面がU字形に近い〔大阪府教委「菅田白鳥遺跡発掘調査報告書」〕。

こうした窖窯（かよう）の形は、須恵器の窯とよく似ているから、四世紀の埴輪の焼成装置が不分明な現段階で推測するのはやや早計であるかもしれないが、さきに述べた土師器の製作との関連を想起するなら、窖窯による埴輪の製作は、須恵器の出現と何等かの関連をもつのであろう。そう推測するなら、前期の古墳にみる大量な埴輪に、いくつかが異なった手法の埴輪がみられるのは、首長傘下の複数のムラでつくられた埴輪がもち寄せられた結果であって、埴輪の生産はなお土師器の生産を基礎にしていたといえよう。しかし、その後、大量な埴輪を要する巨大な大王墓がつくられるようになる、短時日で量産する必要から、須恵器の窖窯の手法を埴輪の生産にとりいれるようになったのではなからうか。このことは、ひいては埴輪製作者の問題にも波及するであろう。

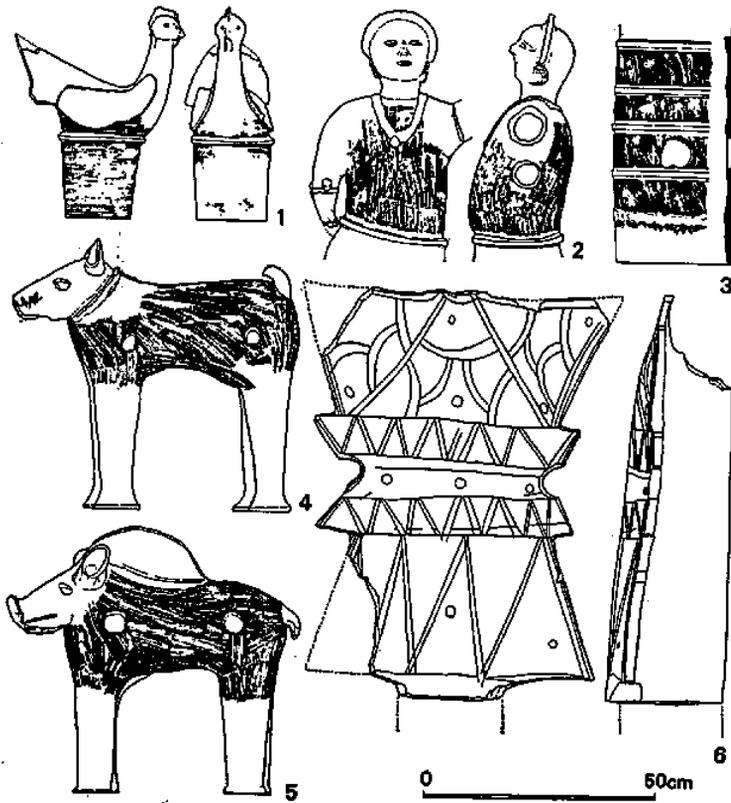


図136 狐塚古墳群 (1)・昼神車塚古墳 (2~5)・新池窯跡 (6) の埴輪 (1鶏, 2ミコ, 3円筒, 4犬, 5猪, 6盾)

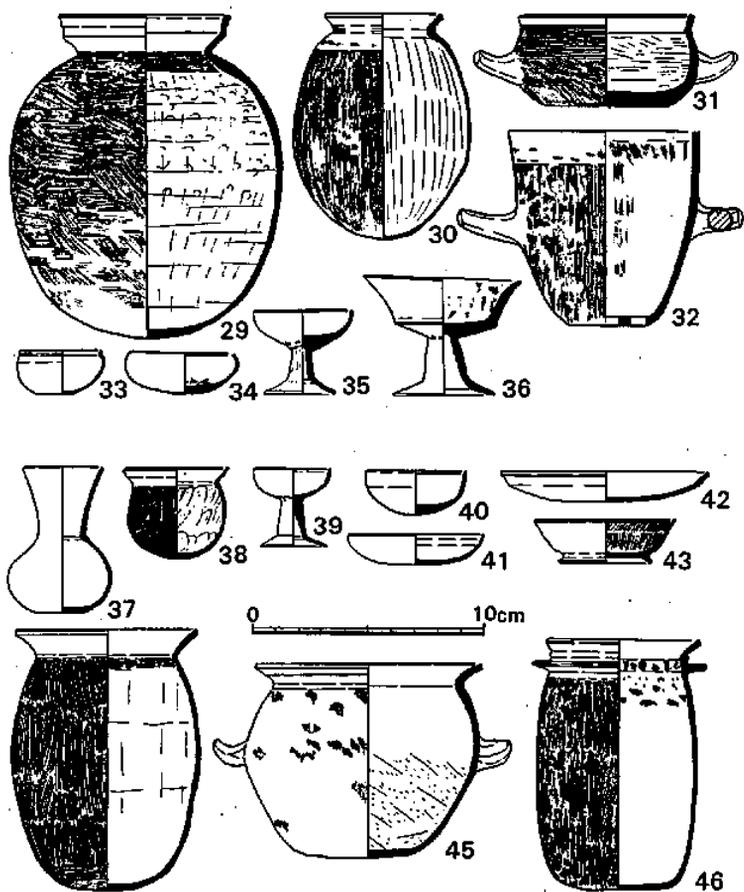
定型化した埴輪は群としてつかわれる器物であるから、一時に大量につくる必要があった。しかも、その製作の動機が、特定の人物の死という哀しむべき動機に発して、生産の基本には、所定の時日や數量を充足するという枠があったから、製作の技法も、生産の体制も、そういう要求を充足する方向で動いた。大量な埴輪をつくるには、そのための集団的労働が組織化されなければならなかった。大量な燃料を集め、粘土を掘り、つきつきに同様の製品をつくる作業は土器の生産とは異質であったとみるべきであろう。この苛酷な労働は、女性のみで労働ではなかった。むしろ、埴輪は男性の労働を前提としてつくられる器物であったとみるべきであろう。

埴輪の製作が、さきに述べたようなものであるとすると、数基の窯でつくる小規模な生産形態では、需要にこたえて一時的量産をはかり得ないであろう。そこから、一種の専門化を招くことになる。

さて、話をもとに戻そう。新池の窯はよくわからないけれど、これまで見つけた埴輪はいずれも六世紀頃のものである。そこから、この窯の成立の年代も同じころであろうという推定が生ずる。しかし、新池のある谷は、詳しく調査したわけではないから、その成立の年代は、なお謎である。窯を構築して埴輪をつくるのが、いつからこの三島でおこなわれるようになったかということは、今後の課題であろう。

川西のムラ

せまい発掘坑ではあったけれど、三基の堅穴住居が、川西遺跡でみつかった。一基は引越したあと火事になったらしい。ほとんど遺物はなかったけれど、上屋の構造を察知させるような放射状の骨組が床面に炭化して残っていた〔大阪府教委「船上部簡」(大阪府教委「船上部簡」)〕。この住居のすぐ隣には須恵器・土師器が混在し、二種類の土器を共用していたと推定された。その須恵器は、土質からみて、あきらかに大阪南部の



上枚遺跡, 26~28 安瀨遺跡, 37 安瀨山古墳群, 38~40 塚原古墳群)

I 考古学からみた原始・古代の高機

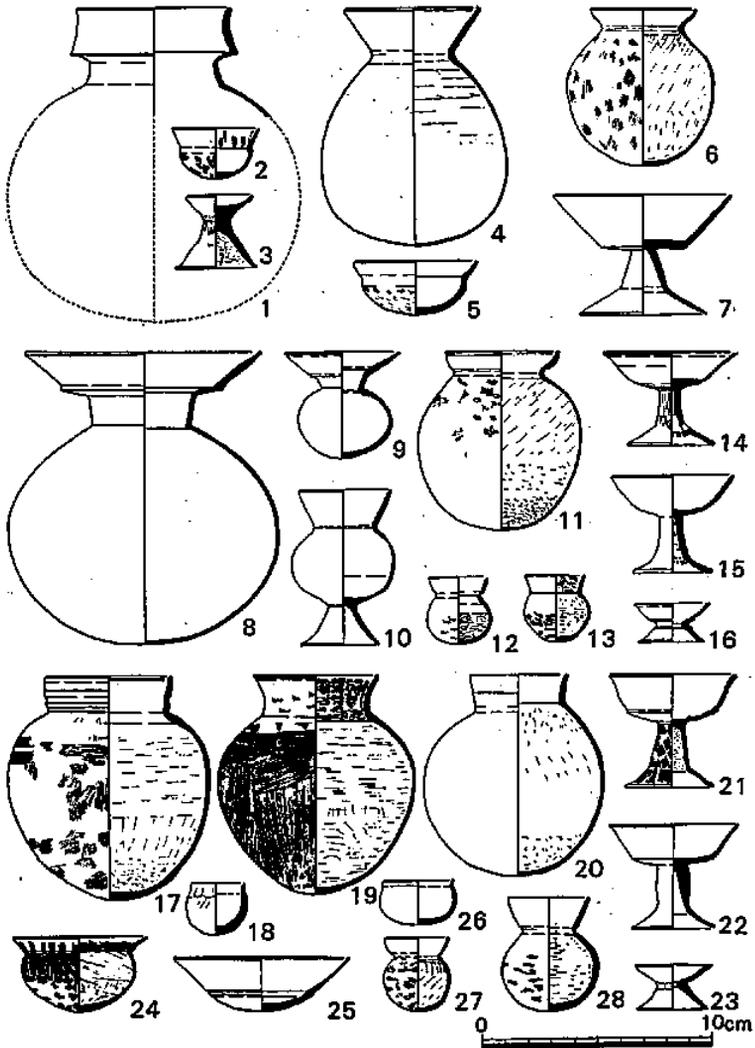


図137 土師器 (1~7・17・19~25・29~36・41・46郡家川西遺跡, 8~16)

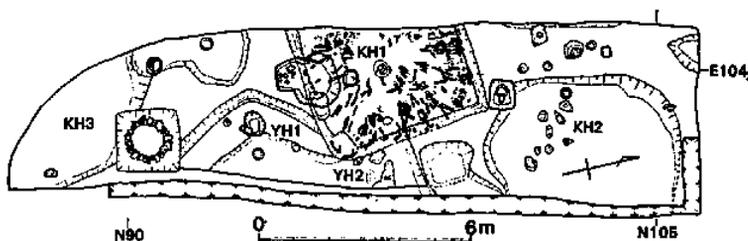


図138 郡家川西遺跡の竪穴住居

陶邑の窯でつくられたと推定し得るもので、須恵器の型式としては最古の型式に属するものであった。ここでは、須恵器の流入の時期を前後にはさんで住居があったわけで、須恵器という新米の土器が、いちはやくこの川西のムラにあらわれ、一般化しているところを見ると、そこに、新文物に敏感に対応したこのムラの特異性をみると共に、陶邑の窯業集団を統轄する政治勢力との間に緊密な関係が成立していたことを知る。それはかつて、田辺昭三氏が指摘されたように、「陶邑窯の製品は中央権力の手を経て、あるいは陶工集団の管事者であった豪族の手を経て全国各地へ供給された」ということと矛盾するものではない。

陶邑ではじまった窯業生産は、その後まもなく豊中市桜井谷でもはじまった。この地の有力首長によって導入されたのであろう。そこは千里丘陵の西にあたる。ここに窯がつくられた理由は、須恵器をつくるに適当な粘土（ただし、海成粘土は高温に耐えられないから不適であるといわれる）が近在にあること、燃料が手軽に入手できること、そのほか水の便や需要者の問題も有利であったことによるのであろう〔鍋島敏也・藤原亨「千里古窯跡群」〕。豊中市に有力な勢力があったことは、豊中市桜塚古墳群のあったことからわかる。この焼物は貯蔵用器・供膳用器として、すぐれた機能を有していたから、はじめから交易品として

Ⅰ 考古学からみた原始・古代の高槻

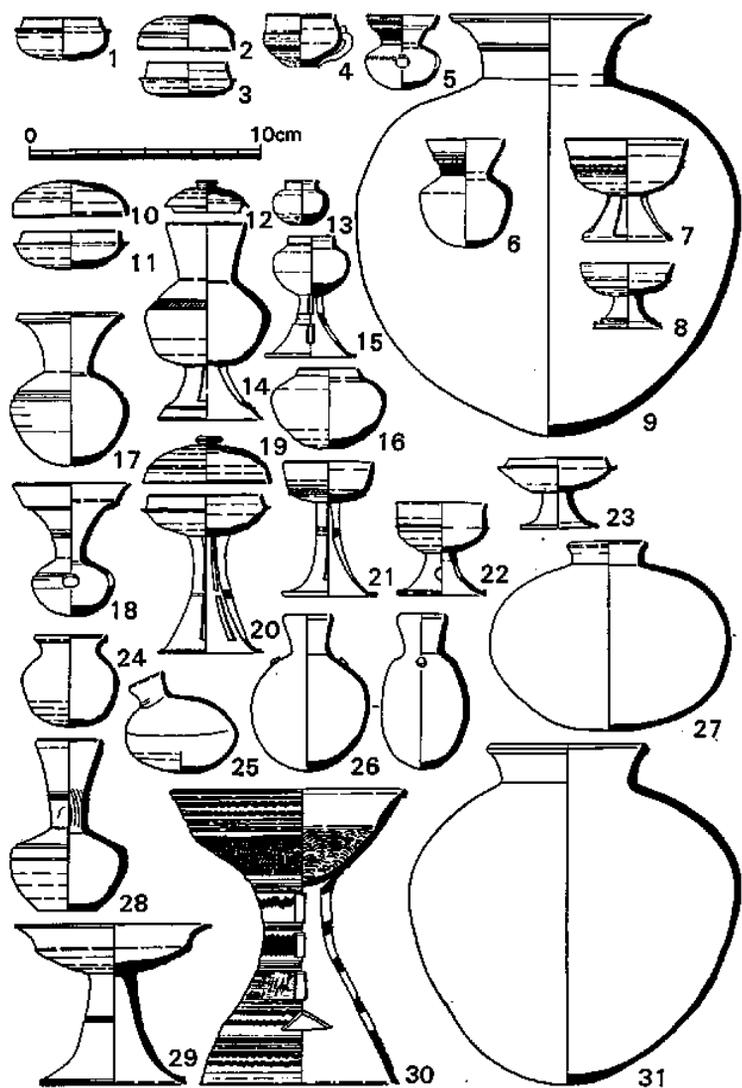


図139 須恵器 (1~4・7~11・31 郡家川西遺跡, 5 宮山遺物散布地, 6 紅茸山祭祀遺跡, 12~14・16・19~27・29・30 塚原古墳群, 15・17・18・28 安満山古墳群)

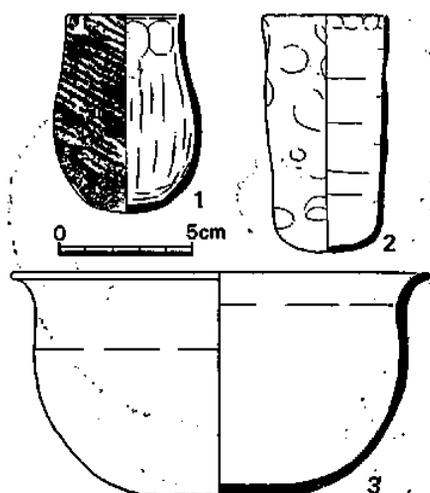


図140 師楽式土器 (1~3郡家川西遺跡)

の性格をもっていた。土師器が旧来の手法を墨守し、自家供給的生産を前提としていたのとは異なっている。だから、この生産と供給は、各ムラの物資流通のコースにのりはじめると、急速に流布したらしい。豊中市核井谷に五世紀に成立した須恵器生産は、その後、六世紀になると千里丘陵の東縁に移る。一つには、原料や燃料の問題もあったと解される。高槻で須恵器の窯がいとなまれるのは、ずいぶんのちのこと、ほぼ七世紀中頃と推定される。

川西のムラのもう一基の堅穴住居も一辺約五メートルの隅丸方形の堅穴住居と推定されるものであるが、そこには茫大な師楽式土器と炭の推積がみられた。師楽式土器は高さ一〇センチメートル・径五センチメートル前後のコップ形をした小型の土器で、厚さ二〜三

ミリメートルの薄い器壁の外面には叩目がついている。この土器は土師器の分派にあたる製塩用の土器で、瀬戸内海沿岸や知多半島・能登半島・若狭などの海浜地帯に多い。その土器が川西のムラに大量にあるということは、瀬戸内の海浜地帯でつくられた塩が、交易によって入手されたことを示すものである。

三基の堅穴住居は、いずれも五世紀中頃にあった川西のムラの一角を示している。この地区より北へ約一〇〇メートルはなれたところ(二六一H区)では、東西

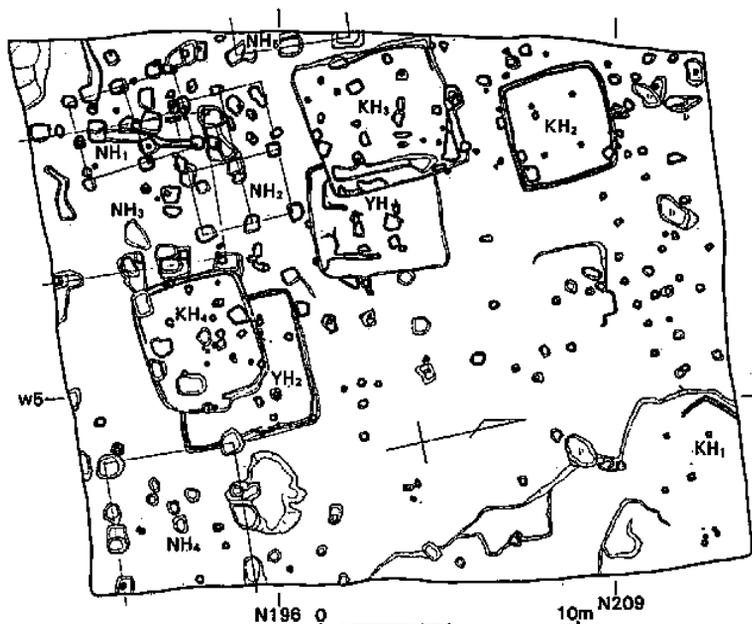


図141 那家川西遺跡の堅穴住居 (16-H区)

約二〇メートル、南北約二五メートルの発掘坑から、弥生時代や奈良時代の住居遺構とともに、古墳時代の四基の堅穴住居がみつかった〔大阪府教委「鶴上郡古」跡発掘調査報告Ⅱ〕。そのうち、北側の一基(KH4)は、四世紀頃のもので、一辺四・四メートルの方形の各辺は、ほぼ正方位に合致し、周壁下に細い溝をめぐるし、その中央には炉があり、約二メートルの間隔で四本の柱がたつ。柱は直径約二〇センチメートル前後と推定される。柱穴は深さ約三〇センチメートルである。この住居の北々西約一二メートルのところにも、方向とつくりの似た一基(KH2)がある。この住居の年代は、五世紀末から六世紀初頭と推定されている。一辺約四・二メートルの方形で、周壁下に浅い溝がめぐり、四

遺物	
器	
・把手	馬の歯
口鉢	
・釜・高杯・壺	
埴・甕・壺	

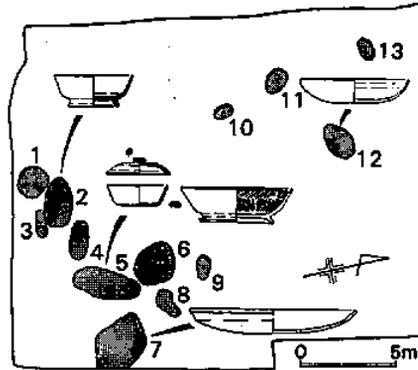


図142 郡家川西遺跡の土埴墓群
(2号墓で馬の歯検出)

本の柱は深さ約三〇センチメートルの柱穴に、径約一五センチメートルの柱をたてて上屋を支えていた。柱の間隔は約一・六メートルである。竪穴北辺の中央に焼土や炭があつたから、竈であろう。住居の中央に炉をつくつてあつたさきの例とは異なっている。床面には、須恵器の杯蓋・高杯や土師器の甕のほか砥石片などがみつかった。この住居の北約二メートルを隔て、六世紀中頃と推定される方形の住居(KH3)がある。一辺約五・二メートルで、その方向は正方位よりややずれる。径約一五センチメートルの四本の柱を、深さ二五センチメートル前後の柱穴にたて、互いに約二・七メートルの間隔である。住居の北辺中央に焼土・炭がある。床面には、須恵器・土師器・砥石などが認められた。個々の住居内に砥石が備えられている例は、すでに弥生時代の芝谷遺跡の住居にもみられた。発掘坑の西南にも、一辺約五メートルの方形住居があるが、その所屬時期は明らかでない。だが、土師器の

I 考古学からみた原始・古代の高槻

表8 郡家川西遺跡土壌墓群遺物

	規 模			土 壌 内 の	
	長辺	短辺	深さ	須 恵 器	土 師
D ₁	1.6	1.5	0.35	蓋杯・高杯脚・甕	杯・高杯・甕・釜
D ₂	2.2	1.5	0.4	杯蓋・蓋・壺・高台付杯	杯・高杯・甕・鉢
D ₃	1.4	0.6	0.4	杯・甕	甕
D ₄	2.1	1.0	0.5	杯蓋・甕・平底壺	杯・高杯・甕・片
D ₅	3.5	1.5	0.6	蓋杯・高台付杯・甕・壺・皿	杯・高台付杯・甕
D ₆	2.5	2.0	0.3	杯・高台付杯・甕・壺	鉢・甕・杯
D ₇	3.0	2.0	0.3	杯身・皿・椀・甕・壺	杯身・高杯・釜・
D ₈ D ₁₂	規 模 小			遺物少数 (D ₁₂ に馬の歯)	

細片や、四本の柱のたて方などからみて、六世紀頃の住居であろうか。四基の住居はいずれも、四本の柱で上屋を支えた寄棟造りの住居で、南側に入口があるの
 であろう。住居の北辺に竈をつくりつける形態は、池田市官之前遺跡の六世紀の方形竈穴住居でもみられた
 から、六世紀には普遍的な形態であった。しかし、一方では、今城塚古墳の家形埴輪にみるような、切妻造りの屋根に堅魚木をのせた堂々たる家屋が支配層の住居としてつくられた。また、墓谷二号墳の家形埴輪のような倉庫かと推定される建物もあった。当時のムラの景観は、堂々たる屋根組みをもった教棟の住居や倉を配置した首長の家と、平均五メートル四方の低い板壁と、四本柱の上に方形の草葺き屋根をのせた家が群在したものであった。当時のムラにはいると、そこには一見して、支配層を区別できるたたずまいがひろがっていた。

川西のムラの東辺、芥川の河原に近いところ(一八一

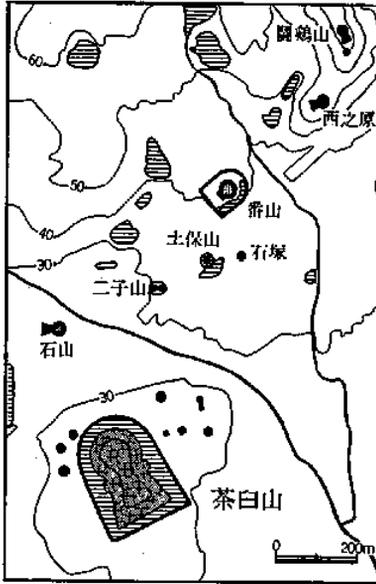


図143 茶白山古墳とその周辺

E区)には、一基の堅穴住居のほか、一〇教基の土壙墓が群がっていた〔大阪府教委「岷上郡衙跡発掘調査概要Ⅱ」〕。七世紀中頃の須恵器が埋土中に含まれていたから、ほぼその年代にあたる墓である。その規模・関係遺物を表示すると、表八にみるとおりである。土壙の規模は小さきままであるが、舟底状の墳は、人体一、二体を収容する程度の大きさで、遺物をみても、全く等質的な墓である。土壙の埋土はほぼ四層に分ち得るが、どの層にも灰や焼土が含まれており、なかに馬の歯を伴ったものが二基ある。茨木市郡遺跡では、土壙内に一頭の馬の首を収容したものが見つかっている。これらは、奈良時代から平安時代にかけて、さかんにつくられた土馬の先駆をなすものであろう。水野正好氏が説かれるように、漢土の神のたたりをおそれて、牛馬を殺して神をまつる慣行が、このムラにもあったのかもしれない〔水野正好「祭礼と饗礼」一〇「古代史稿」〕。

首長墓 さて茶白山古墳の北方にの系列は、關鷄山古墳から西之原古墳さらに番山古墳、石塚古墳、土保山古墳、二子山古墳と配列している。はじめの二基の古墳は丘上につくられた古墳であるが、その詳細は明らかでない。番山古墳は、西向きの帆立貝式古墳で周濠をめぐらしている。小規模な前方部はすでに削られて存在しない。その規模は、外周の濠も含

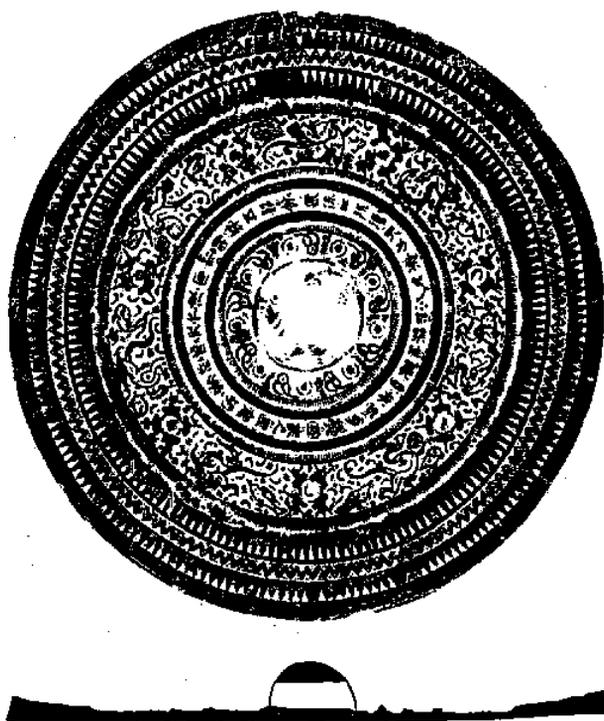


図144 石塚古墳の獣帯鏡

めて、今城塚古墳の北にある前塚古墳と全く同じである。おそらく、この二つの古墳は、同じ計画に基き、東西約一キロメートルを距てて、異なる二つの首長系譜によってつくられた同期の古墳であろう。前塚古墳の内部主体は、現在府立茨木高校にある長持型石棺で、その型式からはほぼ五世紀末の年代を推定できる。

番山古墳の南、名神高速道路を距てたところに、一枚の広い水田がある。明治三十年代に墳丘を削って濠を埋め水田化した際、鏡や鉄刀が見つかったという。いま、そのうちの四霊三瑞鏡一面（径二二・五センチメートル）のみが遺存するにすぎない。この鏡と同范とみられる鏡が、豊中市桜塚古墳群や奈良市大安寺の古墳から出土している。また、同じ文様で、銘文と径の異なる（二四・〇センチメートル）伝仁徳陵発見と称される鏡が現在ボストン美術館にある。仁

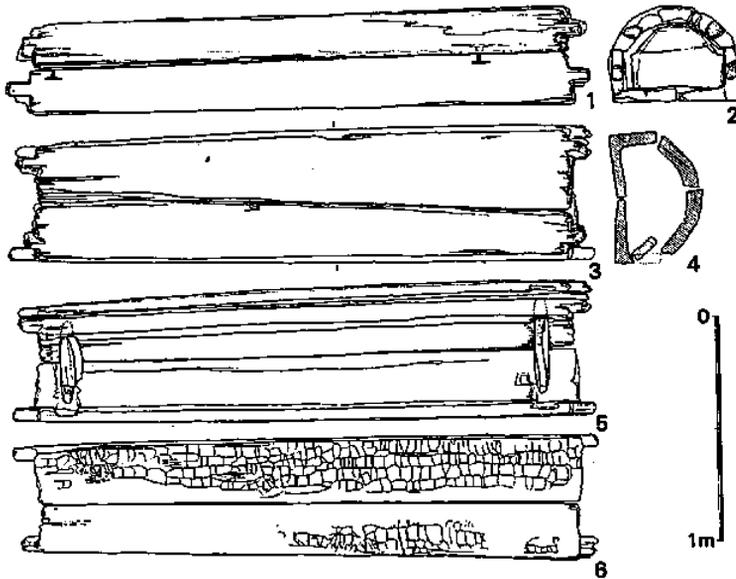


図145 土保山古墳の木棺（2号棺）（1・2側面，3蓋上面，4断面，5身上面，6身底面）

徳陵発見の所伝は疑問としても、この種の鏡が倭の五王の時代に中国からもたらされたことは認めてよいであろう〔小林行雄「倭の『日本書紀』2」。同様の図文をもつ鏡が、近年、百濟武寧王陵から出土した。そのことは、百濟王や倭の諸王と中國王朝との密接な關係を示すだけではない。同式鏡が熊本県の江田船山古墳をはじめ、九州中部に多く見出されることから、五世紀代の倭王の政治的関心が九州中部に及ぼされつつあった側面をうかがうことができる。ともに、倭の五王の政治的統合の方式がなお同范鏡の分与にみられるような古い結合形式を踏襲し、それがこの北撰の一首長にも及ぼされていることがわかる。そしてこの段階の政治的統合の方式は、後に出現する継体天皇の段階のそれとは異なっているようにみら

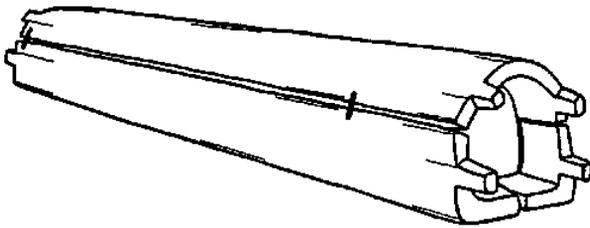


図146 土保山古墳の木棺（2号棺）（復元図）

れる。

この石塚古墳とならぶように、西に接してつくられた土保山古墳も周濠をめぐらす古墳であったが、名神高速道路の路線敷にとりこまれたため消滅した。その際調査したところによると、長軸をほぼ南北においた

長さ約六メートル、幅九〇〜六五センチメートル、深さ八〇〜九〇センチメートルの堅穴式石室内に、長さ約三・八メートルの組合式木棺（一号）があり、その東隣に、長さ約三メートルの組合式木棺（二号）が粘土で被覆して並置してあった。石室は堅穴式とはいえず、壁面最下段は板石を縦に使用し、その上の二段目は横に用いて、あたかも横穴式石室の壁面構築法と共通している。壁面の上半は河原石を小口積みにし、七枚の天井石を架したものである。木棺は大きさが異なるだけで、その形制は同じである。コウヤマキの丸太を縦に四分して、その一本から断面L字形の長い部材をつくる。それは側板と底板半分とを一本でつくったもので、同様な部材二つを向き合わせて身とし、側板の両端に近く溝を彫ってそれぞれ小口板をはめて棺身とし、これに断面弧形の蓋をかぶせたものである。側板の両端には各一個ずつの突起がつくつてある。二号棺では蓋と身を鋸でとめてあった。一号棺には、頭部を北辺において一体の被葬者と、その頭辺に小型の乳文鏡一、ガラス小玉をつらねた頸飾りや櫛などがあり、黒漆膜のみが残った把頭一があった。それにはわが国固有の文様である直弧文が

認められる。また棺内足辺に短甲一がそえてあった。棺外東辺にも短甲一をおき、棺外足辺には馬具をおいてある。棺外西側には黒漆塗りの二枚の盾や三本の鉄鉾がおいてあった。盾は綾杉文や鋸齒文で飾られ、鉾の柄には連続した格子文をつけてあったらしい。

二号棺は武器を納めたものであって、死者を納めたものではない。内部には、矢をいれた靱四、弓六、衝角付冑一、小札綴の草摺・肩甲各二、鎌などが納めてあった。弓はいずれも長さ約二メートル、径約二・五センチメートルで、一は黒漆塗りのままで、他は黒漆塗りで樺巻きがあり、なかには樺巻きのところを赤く塗ったものもある。こうした副葬品の品目をみると、武器・武器の数が多くことに気づく。首長墓の中に、武器・武器を副葬する風潮は、五世紀になってとみに顕著になったもので、そこには支配層の鉄の掌握と、武装した首長の姿がある。この傾向はその後六世紀にも継続し、ここでは新たな大陸風の技術が加わる。

土保山古墳の西にある二子山古墳は、全長約四〇メートルの小形の前方後円墳である。その周濠が名神高遠道路にかかるところから、局部的調査がおこなわれたが、くびれ部南側で、長さ約七メートル、幅約三メートルの造り出しのあることや、幅一〇メートルの濠の外堤に円筒埴輪がならぶことがわかった。くびれ部にある造り出しは、祭壇であろうといわれているもので、応神陵や仁徳陵にもみられる。おそらくその先駆的形態は、弁天山B1号墳やC1号墳のくびれ部近くにある壇状のものからたどれるのかもしれない。ただ、その祭儀がどのようなものであったかは知る由もない。二子山古墳の近傍には、茨木市域内に石山古墳がある。

先年、工事によって破壊されてしまったが、その際、多数の鉄製の刀剣・鍔・斧のほか、鉄銚や埴輪・土



図147 今城塚とその周辺

師器・須恵器の破片が見つかった。すでに破壊された後だったため、その詳細は明らかではないが、調査に当たった免山篤氏は、五世紀後半に属する直径約三〇メートルの円墳を推定した。しかし一方で、西向きの方後円墳の可能性も考慮している〔免山篤「石山古墳の調査報告」〔告〕茨木市文化財資料集9〕。ここで注意すべきは、先述の一連の諸古墳と細い水路を距てて位置するこの古墳が、一群として包括されず、むしろ茶臼山古墳に関連すると解されていることである。もし、そうだとすれば、台地上の茶臼山古墳を含む一群と、土室に群在する一群とを界する境界が、その間を流れる細流にあり、性格の異なる両古墳群の营造集団の領界意識がうかがえる興味ある事象とすべきであろう。

今城塚古 土室の一群と対比できるのは、今城塚古墳の周辺にある古墳群である。前塚古墳については、その東北の丘陵にある車塚古墳は、同名の古墳が天神山のふもとにあるところから、郡家の地名を冠して呼ばれている。西向きの前方後円墳であって、埴輪が認められるが、その内容は明らかでない。丘陵と墳丘を堤でつなぎ、その間を溜池としているため、一見周濠をもつようにみえるけれども、本来は、斜面に営まれた周濠のない古墳である。

前塚古墳が、あたかも今城塚古墳の外域延長線上に位置するように、水室塚古墳もまた、その対する外域延長上に位置していた。そのため今城塚古墳の陪塚と解されたこともあつ

た。消滅したこの前方後円墳も、前塚古墳と同様、今城塚古墳に先行する年代のものであったろう。しかし、周濠も北向きの姿も消えて、住宅地に化してしまった。このほか、今城塚古墳の周辺には「掛塚」・「狐塚」・「神輿塚」などの塚名を小字にとどめたり、それらしき地貌・地物を残すところがあるが、近年、ようやくそれらの実態が明らかになりつつある。掛塚については不明であるが、神輿塚と称する小隆起は、一枚の凝灰岩の板石が立つのみで、古墳ではない。ただ、この板石がどのような性格のものであるか、今後調査の要がある。

狐塚と称する小隆起は、今城塚の東辺にあつて、もと家畜小屋の一角をなしていた。調査の結果、水田中に盛土した小丘ではあるが、何等古墳とすべきものではないことが明らかになった。ところが、この一帯には広範囲にわたって五世紀以降の土壙墓群が群在し、その東縁には方墳四基がならぶことが知られるにいたつた。そこで、以後、この遺跡名を「狐塚古墳群」と称することに改めた〔高槻市教育委員会「狐塚」古墳群発掘調査概略〕。

東西約八五メートル、南北約一〇〇メートルの地域を二次にわけて調査した結果は以下のとおりである。地域の東南部に、大は一辺約一七メートル、小は一辺約八メートルの方墳がある。大きいのは主軸を西へずらしながら北へならび、小墳は南の一墳の東側に位置する。いずれも周濠は重複せず、弥生時代後期の方形周溝墓にはじまる造作を継承している。だが列状に配列するところは、弥生時代のそれと共通し、同一血縁者の墓であることをみせている。内部には小土壙教基を認めるが、それも大小あつて、家族墓の色彩が濃い。また、中央の最大のものには、周濠内に五基の土壙が一行につくられ、そのうちの一つには、五世紀末の須恵器・土師器を副葬してあつた。それより推して、この方墳群の年代の一点を知ることができる。この

Ⅱ 考古学からみた原始・古代の高槻

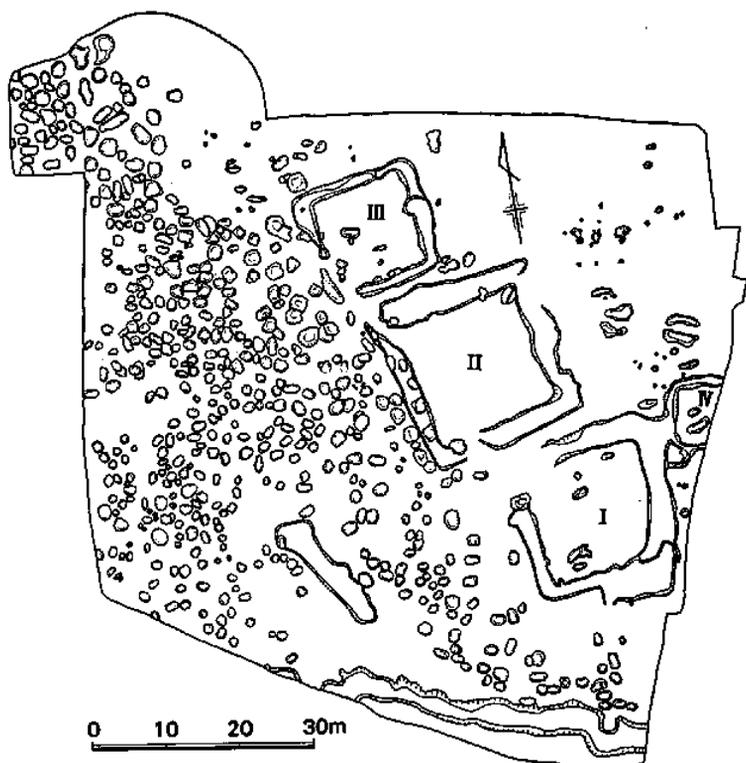


図148 狐塚古墳群

西に群在する六〇〇基以上の土壇墓群は、そのほとんどが副葬品を伴わず、個別に年代を確定することは困難である。副葬品を伴うものと伴わないものの比は、ほぼ一〇対一の割合で、伴うものにあっても、土師器の甕・釜・埴・壺・須恵器の甕、埴輪などのほか瓦器も加わりさまざまである。また、埴輪には円筒埴輪のほか、家・鶏・武人などがある。土壇の形態もまた多様であって、その平面形が円・楕円・長楕円・正方・長方の各形が認められる。平均的

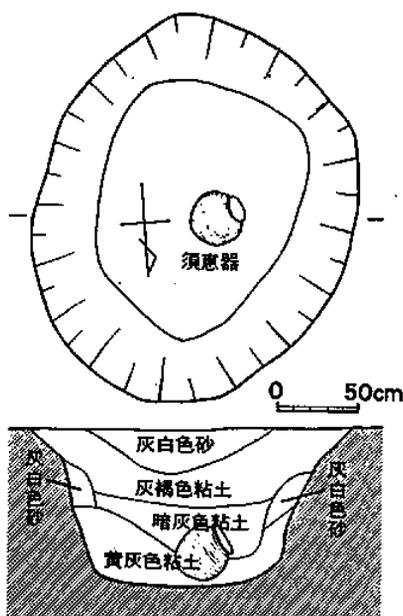


図149 狐塚古墳群の土壙墓

ながら重複していないところを見ると、本来、地表には封土のような標識となる構造物があったのであろう。目下、それぞれをグループに分ち、被葬者の単位を析出する作業は進行中で、結論を得るにいたっていない。

これらの土壙墓群の南には、幅約二メートルの浅い溝が東西に走り、これを越えてつくられた土壙墓のなるところをみると、この小溝が墓域の南を限るものらしい。墓域はさらに西北部へ拡がることから知られるから、さらにその総数は増加するとみてよい。五世紀末につくられた方墳以後、その西側に累々と形成されたこの土壙墓群は、西から東へ緩やかに傾斜する地形に営まれたもので、これらの被葬者は、このすぐ東にある川西遺跡の住人であろう。方墳が東方の集落からみて目立つ位置を占め、土壙墓群がその西方の陰にかくれる部分に、長期にわたってつくられている状況は、共同墓地のみならず、村落内部のあり方を知るうえで重要である。

な大きさは、幅約一メートル、長さ約一・五メートルであるが、小さいものでは五〇センチメートルである。棺様の施設はないが、一部のものでは、木板の蓋をしたと推定されるものがある。その年代は、瓦器を蔵する一群が、東南部にあり、西北部の土壙に大型のものが多く傾斜をとりあげるなら、この西北辺のものを古く、東南辺のものを新しくし得るであろう。いずれも近接し

今城塚古墳

今城塚古墳は郡家の西にある巨大な前方後円墳である。西北に前方部があり、墳丘の全長約一九〇メートル、後円部径約一〇〇メートル、その高さ約九メートル、前方部の幅約一四〇メートル、その高さ約一二メートルである。上から見ると前方部がひろがり、横からみると前方部が高い。このすぐ北の丘上にある岡本山古墳と比べると、同じ前方後円墳なのに、その規模が大きく、前方部がことさら大きくつくられているようにみえる。しかも、今城塚古墳は二重の濠さえめぐらして、濠を分つ堤は垂直で人を寄せつけない。どうしてこんなに変わったのかということに關する解釈はいろいろある。そのうちの有力な解釈は、前方後円墳ははじめは自然の地形を利用して、尾根の頂きや丘の先端につくった。そして、埋葬する場所は高くつくり、その前方には細長く平坦な広場をつくって儀式をやる。つまり、埋葬の場所と葬祭の場所とが立体的な構成として考えられていた。ところが、やがて平坦なところにつくるようになると、傾斜地に立地する古墳の各部の規模を、そのまま平坦地にうつしたため前方部と後円部のつりあい、すっきり変ってしまった。だから、徐々に前方部が大きくなったのではなく、人工の造山計画によって突然変化したものであるというのである。ところが、この前方部という曲者は、さらにおかしなことになる。追葬が可能な横穴式石室が採用されるようになると、遺骸を納める部屋（玄室）（*けんしつ*）を後円部の中心につくりたい。しかも、大きな石をつかって部屋をつくる以上、その重さを支えるには盛土ではあぶないから固い地山でないといけない。また、玄室まで達する長い廊下（羨道）（*せんどう*）を一六メートルよりも長くつくったものがない。そんなわけで、後円部が縮少しはじめる」と説明されている。〔小林行雄・近畿畿部・古墳の。変遷—「世界考古学大系」Ⅲ〕

もともと前方後円墳というものが、特別な死者に前首長を納めるところと、それにむかって新首長が儀式

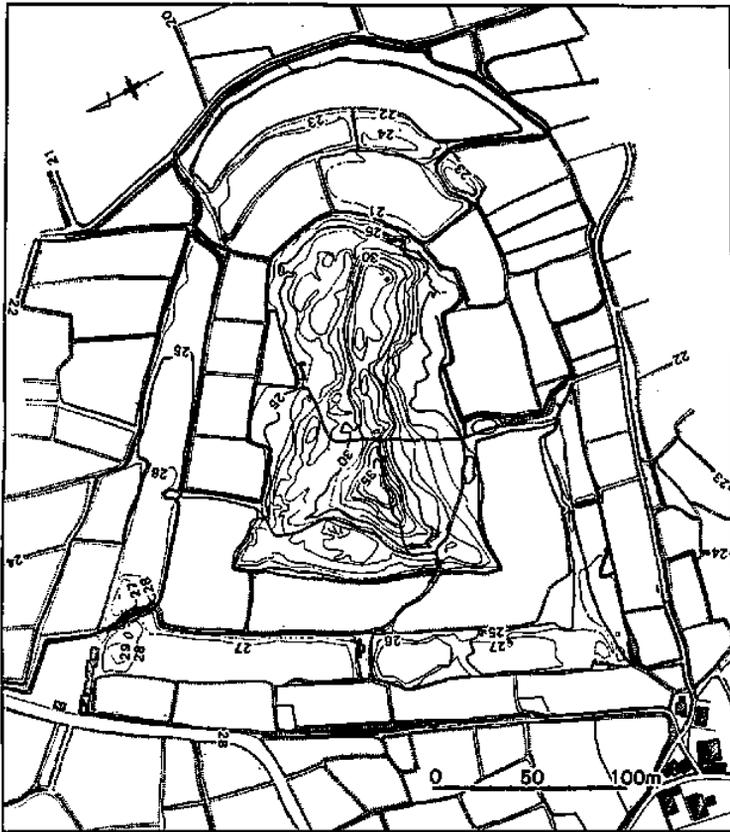


図150 今城塚古墳

をやるところと二つの構成体の結合したものとして出発したと考えると、のちに、後円部に二つの方壇を設けたり（双方中円墳）、祭式の場である前方部を縮少したもの（帆立貝式古墳）がつくられたりするといった現象は、この二つの構成体が首長の経済的・政治的地位と密接な関係があるからである

う。小野山節氏が墳丘の規模・副葬品等を対比して、古墳時代に数次の規制がおこなわれたとする見解は、その点で注目すべきである。〔小野山節「古墳と王朝の歩み」『古代史叢書』V〕

今城塚古墳は、北から南へのびた丘陵が、断層によって切断された南側の残丘部を利用してつくられたらしい。西北にむくこの古墳の右（北）側の内堤、とくにその前方部の隅角部は基盤層が高く残っている。そして外域の北側は、南側に比べて約五メートル高いから、この古墳をつくるにあたって、前方部を高くする意図から、それを高い方に設定したと推定される。

墳丘はかなり原状に変更を加えられている。とくに後円部の中央には東南から西北にむけて、深い掘割があり、この掘割より東半分は、西半分より約五メートルも低い、中世に城柵を設けたときの名残りであろうか。くびれ部に近く造り出しがある。本来左右にそれぞれあったのであろう。だが左（西南）側のそれは、内濠を埋めて水田をつくる際に破壊されたらしい。また、内堤の一部も同様に破壊されている。外濠もそのほとんどは水田となっているが、最近、東北部で外濠の一部を検出した。この一帯に外堤が認められないのは、前塚古墳の東にある池が決壊した際に流欠したものであろう。西南の外堤も部分的に破壊されているが、その大部分は細い里道になっている。この道の外側にある細い畠は、外堤の部分であって、近年その延長部に相当するところを調査した。それによると、さきの畠の西側の水路は、外堤の外画線に相当し、その延長部とみられる浅い溝が二本あった。外堤上に埴輪を配列してあった可能性は少ない。内堤には大型円筒埴輪のほか、種々の形象埴輪（家・武人など）がある。

この古墳の被葬者を継体天皇とする説がある。かつて、天坊幸彦氏（故人）は、三島地方の条里制の研究を

もとに、「延喜諸陵式」にその所在を島上郡とする。継体天皇三島藍野陵は、今城塚古墳に該当することを論じた〔天坊筆彦「今城塚」「上代史」の推定は、今城塚古墳を前方後円墳の新しい形態とする考古学の知見と矛盾しない。さらに最近おこなわれた茨木市太田・茶臼山古墳の周辺部一帯の調査で、漆の外縁に配列した円筒埴輪列の一部が判明した。その埴輪の年代を五世紀後半とする調査結果もその一助となろう。

さて、この古墳の被葬者を継体天皇とし、その年代を六世紀前半とし得るなら、なぜこの三島の地に、継体天皇の墓がつくられたのであろうか。

継体天皇の系譜については、古事記と日本書紀は応神天皇の五世の孫と記すだけで、その間の歴代を省略する異例の書き方である。その欠を補うものとして、五世のそれぞれを掲げる積日本紀所引の上宮記逸文があるが、この系図については疑問視する説と容認する説とがある。ともあれ、前代の小泊瀬(武烈)天皇を暴君として描写し、大鷦鷯(仁徳)天皇の皇系が、この天皇で断絶することは注意すべきことである。その後における男大迹の即位までのいきさつも尋常でない。古事記では近淡海国より出て皇位に就いたというが、書紀によれば、父王が近江国高嶋郡三尾の別業に滞在し、三国の坂中井(越前国坂井郡)の振媛を妃としたこと、父の死後、母に伴われて越前の高向に帰り、そこで養育されたという。また即位に際して三国より迎えられる。その後、元年には樟葉宮(大阪府枚方市樟葉)に行き、五年には山背の筒城(京都府綴喜郡)に、十二年には弟国(京都府乙訓郡)にうつり、二十年に磐余の玉穗(奈良県桜井市)に都し、二十五年玉穗宮で没したので、藍野陵に葬ったという。書紀が記す八人の妃のうち、四人は近江の三尾・坂田・息長の出身であり、古事記もこれらの首長との結合を示唆している。

1 考古学からみた原始・古代の高機

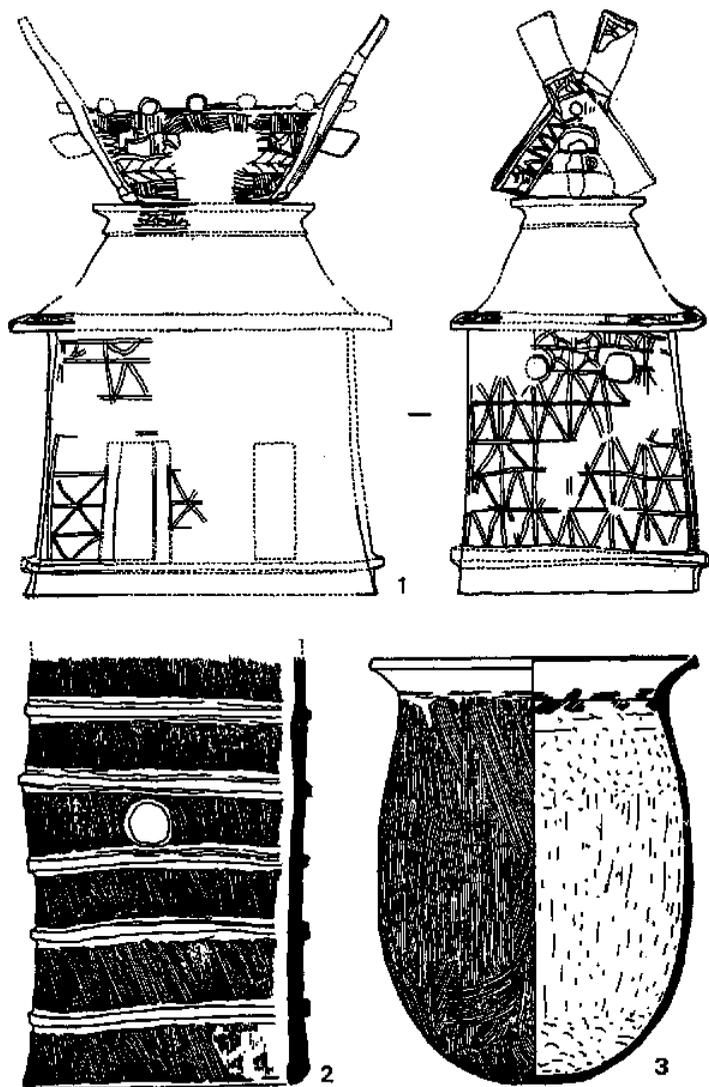


図151 今城塚古墳の埴輪(1・2)と土師器(3)(1家, 2円筒)(1約1/18.5(2)約1/10.5,(3)約1/5

応神天皇の末裔とされる継体天皇に関する記載が、記紀において部分的に相違があるとはいへ、そこには近江の琵琶湖北半の諸勢力との結びつきがうかがえる。しかも、この三島の対岸にあたる楠葉やその東の綴喜、あるいは北の乙訓が宮や都の地として記載され、彼の墓が三島につくられたというのは、淀川や木津川・桂川沿岸の諸勢力を包括していることを示すのであろう。また、記紀ともに、武烈天皇をもってその皇統が断絶すること、継体天皇が系譜的に応神天皇に結びつけられていることの背後には、仁徳以下の諸王——それを「倭の五王」と解するなら——とは異なった首長集団のあったことを語っているのかもしれない。以上のことから推測するなら、継体の出現する背景として、淀川から琵琶湖をふくむ畿内北辺に、一つの政治勢力のあったことを想定させる。その政治勢力の頂点にあって主導的役割を果たしたのが継体であったのであろう。三島の首長たちも古くは弥生時代にまでも遡り得るような淀川水系の地域的連帯を縁由として、その勢力を構成する分子であったと推測する。その場合、三島の占める地理的位置は、瀬戸内への門戸を扼し、かつ、河内・和泉の諸勢力と対峙する意味をもつ。この外交・軍事上の重要性は、三島を重視することにつながる。継体が大和や河内に墓を営まなかつたのは、彼が本来畿内中枢部の出身でなかつたからであるが、それと同時に、いま述べたような政治的背景を考慮して三島に彼の墓をつくつたのであろう。そのような政治的配慮から、本質地を離れた勢力圏内に、傘下の首長結合のシンボルとして造墓の事業をおこすやり方の先駆的形態は、すでに完全なまでに「倭の五王」たちが築きあげてあった。その萌芽は前方後円墳自体の属性の中に、もともと含まれていたことはいうまでもない。

継体の墓が今城塚古墳であるとするなら、その造営に力があった首長として、三島県主を当てることができ

よう。安閑紀にみえる、竹村屯倉設置にまつわる三島原主飯粒の説話も、その基底に造墓の事業と一脉通ずるものがあるのであろう。

今城塚古墳のあと、この三島でこのような巨大な古墳はあらわれない。それは継体死後の新たな事態をそのまま反映しているようにみえる。その新たな政治的変化の一端を三島では群集墳の出現にみる事ができる。

第三節 律令体制への傾斜

群集墳

今城塚古墳ができた六世紀前半期、この三島地方でも、横穴式石室と呼ぶ新米の墓があらわれる。それは、堅固な地盤に奥壁となる巨石を据え、それより南方へ側石を組みあげて方形の石室をつくり、その南側に羨道と呼ぶ廊下を構築したものである。羨道の入口を横石で閉塞することによって、数次の埋葬をおこなえる。こうした墓の原型は中国にあり、ここでは磚を積みあげて墓室をつくった。その構造は、のちに朝鮮半島の高句麗や百済にも伝わり、東アジアの国際交流のなかで、わが国にも伝わってきた。

巨石をあつかう以上、一基の横穴式石室をつくるには、石の運搬や石組みに熟達した石工の参加が必要である。そのためのコロやテコの利用はもちろん、修羅しゆらのようなものも活用されたであろう。石室を構築するにあたって、あらかじめ構想する規模に従って地山の掘さくがおこなわれたことは、いうまでもない。石

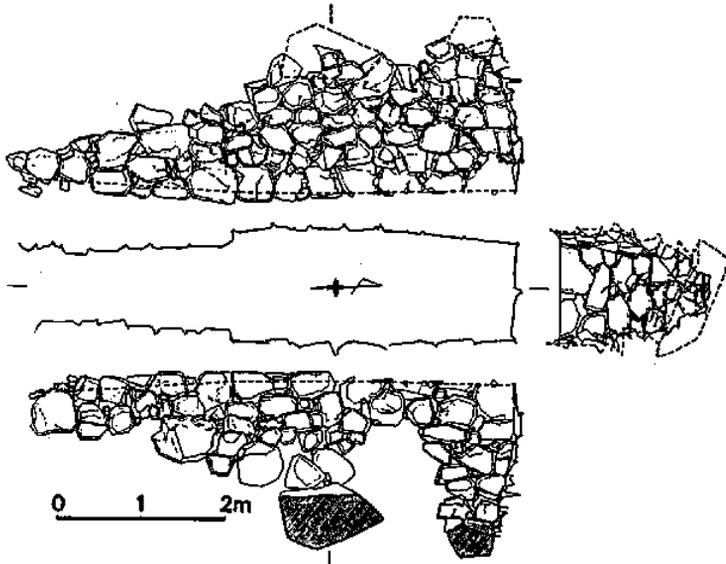


図152 塚原F 2号墳の横穴式石室

室の最下段の石材は、箱型になるように立てて用い、その平面形も胴張りのあるものがあるところを見ると、上部の荷重を考慮した力学的配慮があったらしい。

死者を追葬し得る墓が採用されるようになったことは、葬送の觀念にも、大陸・半島風のもものが流入したことを物語るのであろう。

ただ、さきにも狐塚の土壙墓群でもみたように、ムラの一般の人びとはなお、ムラはずれの共同墓地の簡素な土壙に収められていたのであって、新米の葬墓形式をとり入れた人びとは、ムラの有力家族であった。

八世紀の古事記が記す「黄泉の国」の話は、まさに横穴式石室を想定したものである。この種の墓は、石材の供給と運搬の便という条件にかなり制約されるらしい。そのため、その条件にかなうところでは、次々に造

I 考古学からみた原始・古代の高槻



図153 塚原古墳群 (1:10000)

墓がおこなわれ、塚原古墳群のように一〇〇基以上の墓が群集し、「塚原八十塚」の名称さえ生じた。このように群集するものを「群集墳」と呼んでいるけれども、小規模なものでは数基で構成される場合もある。

実際、一〇〇基にもおよぶ場合でも、その基本的単位は二ないし四基の古墳が集積したもので、そこには一つの家族（世帯共同体）が世代を重ねて古墳をつくり加えていった様子がうかがえる。いまでは、それらを結ぶ墓道をも想定されるようになった。広大な塚原古墳群も、各群にいたる墓道を見分けるなら、大きくは二つの谷筋を主要な道として分つことができる。一は安威川にかかる道灌橋の北一〇〇メートルに開口する谷筋を遡って阿武山の南側斜面にいたり、他は件の橋の南二〇〇メートルに開口する谷筋をとって阿武山の東側斜面にいたる。こうした道筋と、尾根や斜面の利用に多少の相違がみられるのは、この群集墳を構成する集団が、それぞれ居住地を異にすることと対応することによるのであろう。ただ、いずれの道筋も安威川に結ぶところをみると、葬送の棺は安威川沿岸のムラむらから発して、この丘陵にいたったとみられる。墓の詳細は第六巻にゆずるとして、一、二の注意にのぼる事柄を付記しておこう。

この群集墳の成立は、六世紀中頃にはじまると推定されるが、阿武山南側斜面では、高所にあるD群、東側斜面ではE・F・Gの三群が比較的早くつくられたらしい。そのうちには、馬具や馬形埴輪などを有し、後述の他の群集墳とはやや性格を異にする。また、丘頂に近いN群や丘陵のB群等には、矮小な小型石室があつて、この群集墳の終期に近い段階の姿を示している。とくにN群については、木棺一基をかるうじて収容し得るほどの簡単な石囲い状の石室であり、副葬品もまた乏しい。そのうち、尾根を異にするN2号墳は濠をめぐらした一辺約九メートルの方墳であり、その内部には箱型の木棺一基を土中に直葬してあつた。他

1 考古学からみた原始・古代の高槻

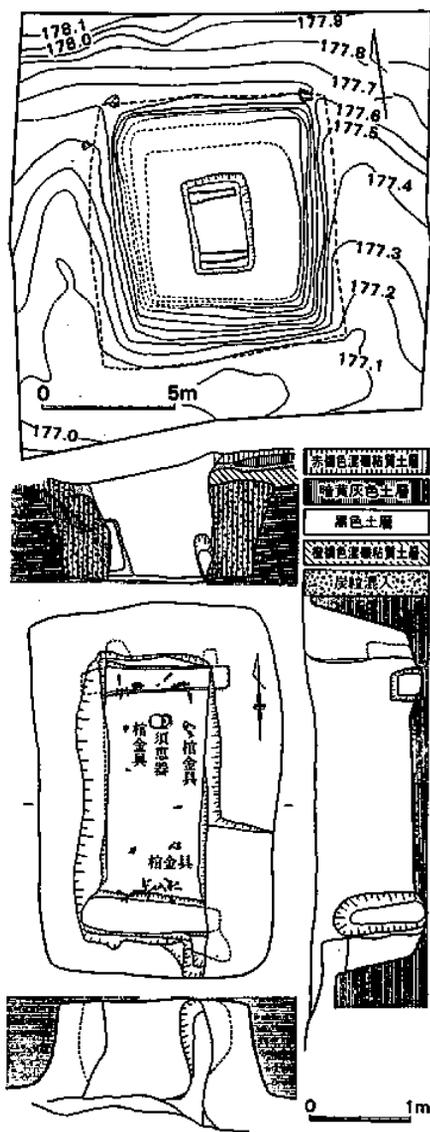


図154 塚原N2号墳の墳丘と主体部

に南の丘麓のA群中にも濠をめぐらす一基の方墳があるが、その年代は詳かでない。
 塚原古墳群の北約七〇〇メートルの片ヶ谷の谷奥にも、大小四群からなる群集墳が知られている。この谷筋から東南へのぞむ一点に殿岡神社境内の古墳があり、そこからさらに南へ行くと、谷中に皇子塚古墳と称される独立墳がある。こうした独立墳の選地は、片ヶ谷から、奈佐原・岡本へ通ずる谷筋が、その南方へひろがるムラむらの道筋にあたることを暗示しているのであろう。

郡家の北の後背丘陵は、すでに宅地化してしまっただが、かつてその丘の尾根上には郡家の墓地があり、その南に近く、六世紀後半の横穴式石室群七基があった。これらは丘陵の郡家の墓であろう。また、芥川の西

岸、塚穴にも四基の円墳がある。それらを服部の宮之川原に結びつけ得るなら、その被葬者たちは、かつて西の丘上に前方後方墳や前方後円墳を築いた首長たちの末裔であろう。服部の塚脇にも、帯仕山の南斜面を利用した群集墳がある。そのうちには、巨石を用いて石室を構築したものがあり、また付近に産する花崗岩の割石を利用しているものもあって、年代の七世紀にくだるものがみられる。

天神山の参道を上った右側に小祠があり、宿弥塚の名称で呼ばれているが、この小墳を野見宿弥の墓とする伝承の真疑は別としても、この一墳が横穴式石室であったことは疑いない。しかし、長年曝露したままであったから、その属する年代を示す遺物は失われ、詳かにしない。この古墳の南方、丘麓の高まりを利用してつくられた北向き前方後円墳は、屋神車塚古墳と呼ばれ、最近道路敷設によって、その前方部の調査がおこなわれた。墳丘は弥生時代中期の包含層上にあり、三段の築成をみせる前方部中段から、イノシシ・イヌ・ミコを像った形象埴輪と円筒埴輪が一行に配列された状態であらわれた。その内部主体は明らかでない

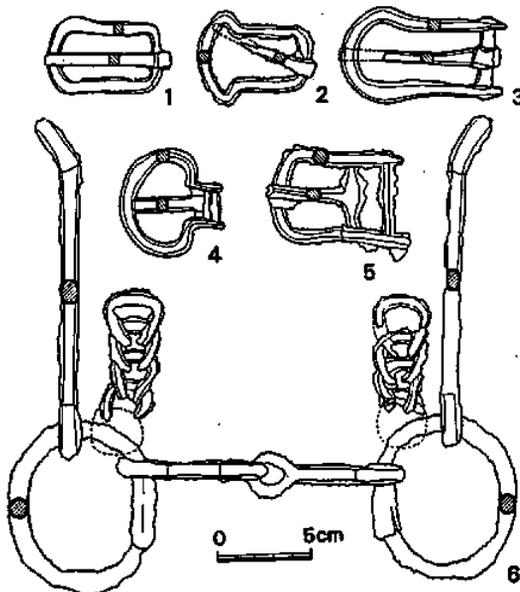


図155 塚原(1・3・4・6)・安満山(2)・塚脇(5)古墳群の馬具(1~5鍔具, 6轡)

Ⅰ 考古学からみた原始・古代の高槻

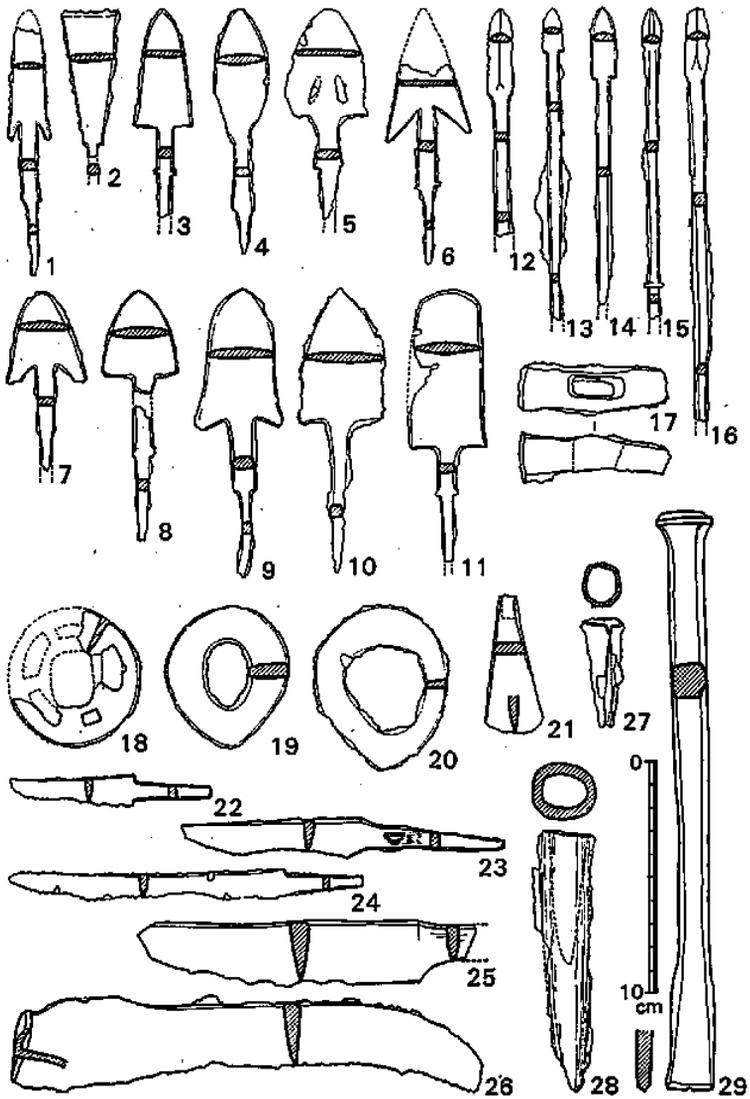


図156 塚原(1~16・18~22・24~29)・塚脇(17・23)古墳群の鉄製品(1~16鉄, 17鉛, 18~20銅, 21楔, 22~25刀子, 26鎌, 27・28石突, 29鏝)

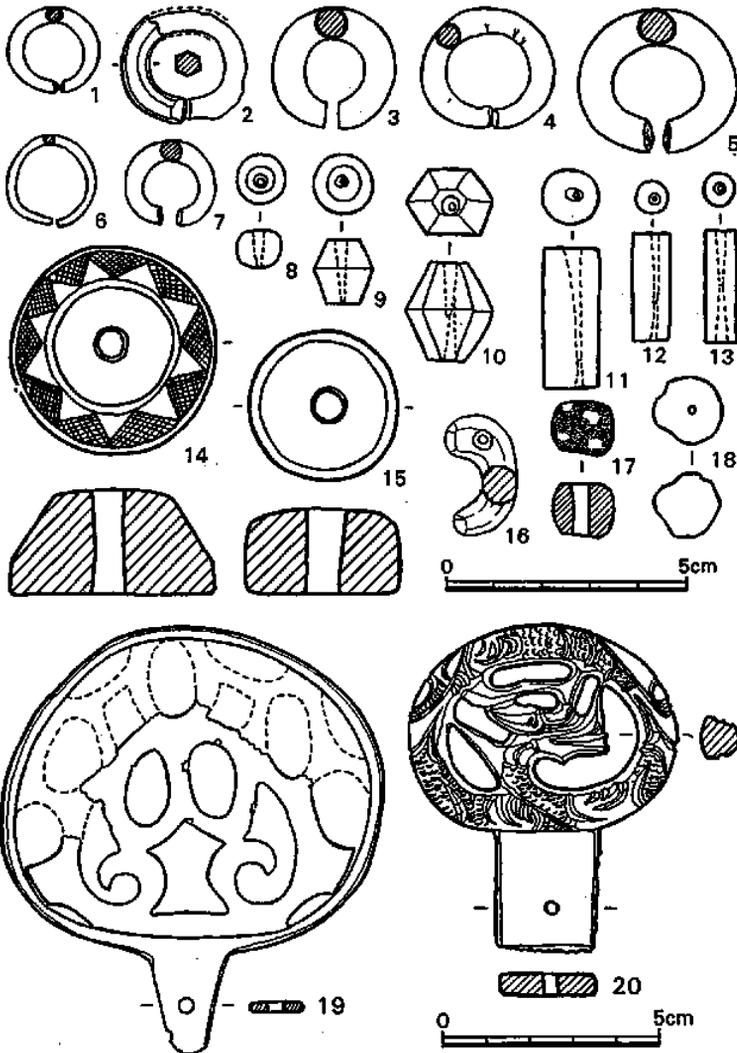


図157 塚脇(1・14~16)・塚原(2~13・17・18)古墳群の遺物(1~7耳飾, 8・9ガラス玉, 10切子玉, 11~13管玉, 14~15紡錘車, 16勾玉, 17トンボ玉, 18空玉, 19・20把頭)

けれども、この昼神山の中將塚やさきの宿弥塚・車塚、さらに南の分水界上にあつたと推定される鼓塚等は、東方より望見し得る一群の首長墓であつたと推定できる。そのムラは、東麓の古曾部から安満西のあたりであろう。別所の北には、丘頂に横穴式石室を営む羅王山古墳があり、その南や東の斜面に古墳が群在している。紅葺山の横穴式石室もそれらと一群をなすものかもしれない。安満の北の安満山には、四〇基以上を算する群集墳が尾根上に点在する。六世紀後半を中心につくられたこの古墳群には、墳丘や石室の旧状をそのまま残したものがあり、なかに方墳や埴輪をそなえたものもあつて、その規模から推して、安満の有力者の墓とするに十分である。ただ、この群集墳は武器や馬具を副葬するものが少ないから、その被葬者の性格を、塚原のそれに比べるなら、武人的色彩に乏しい。安満山の麓にも数基をもつて一群となる古墳の集団が、ほぼ五〇〇〜六〇〇メートルごとに見られる。その延長は神内（こまな）の数基の古墳や島本町の越谷古墳群にもおよぶもので、六・七世紀にこの近傍にムラが点在していたことを示している。

これまで述べてきた群集墳と同様の横穴式石室を用いながら、前方後円形の墳丘をもつものがある。茨木市宿久庄の南塚古墳がそれであつて、近くの青松塚古墳や海北塚古墳も含めて、これら三基の古墳はかつて丘上に築かれた前期の紫金山古墳につらなる首長墓であろう。また、茨木市福井の將軍山古墳の北にも巨大な横穴式石室があり、同耳原には方形の鼻摺古墳や二基の石棺を有する耳原古墳などがみられる。茨木市郡（たが）一帯にも小墳の群集があつたし、その南の穂積近辺では、塚原古墳群の一墳と墓墳・石室の法量を同じくする見付山古墳や特異な構造をもつ上寺山古墳（黒塚）などがみられる。また、総持寺一帯の台地上にも、数基の古墳がみられたが、その性格は明らかでない。

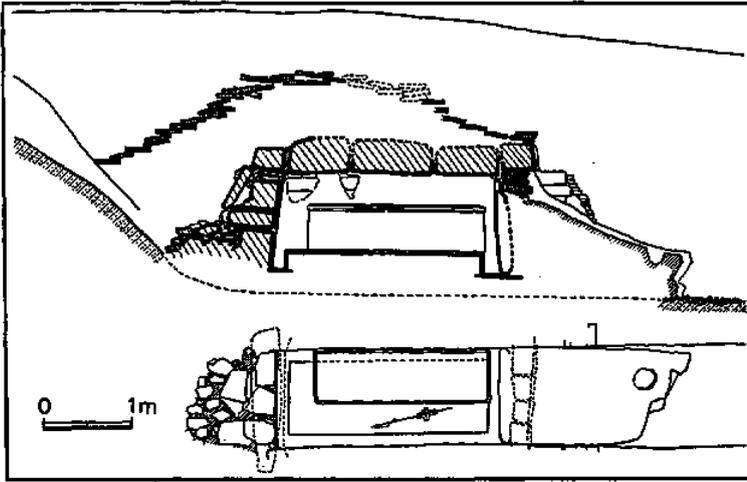


図158 阿武山古墳の石室

三島地方の六・七世紀の状況は、古墳群の経営にみるように、広範かつ活発な地域的發展をみせる。おそらく、その背後には、急速なこの沃野の開発がおこなわれているのであろう。茨木市安威川沿岸の溝ほく遺跡のような巨大なムラが、中小河川の沿岸に続々と成立していくのは、前代からの耕地の拡大が、この段階に一つの大きな成果を生みはじめていたことを示すのであろう。三島の沃野は、いまや千里丘陵の窯業地帯から、東辺の水無瀬川沿岸地域まで一体となって、新しい歴史の中に組織されつつあったといえよう。

貴人の墓

塚原の群集墳の消えていくその最後に、神棚とも呼ばれる美人山の頂に、老年の貴人の墓が一基忽然と姿をあらわす。その場所は、三島を一望に見渡せる絶好の場所であり、その墓の主が「藤原鎌足」その人か否かを決し得ずとも、その墓の結構は極めて特異な人物である

Ⅰ 考古学からみた原始・古代の高槻

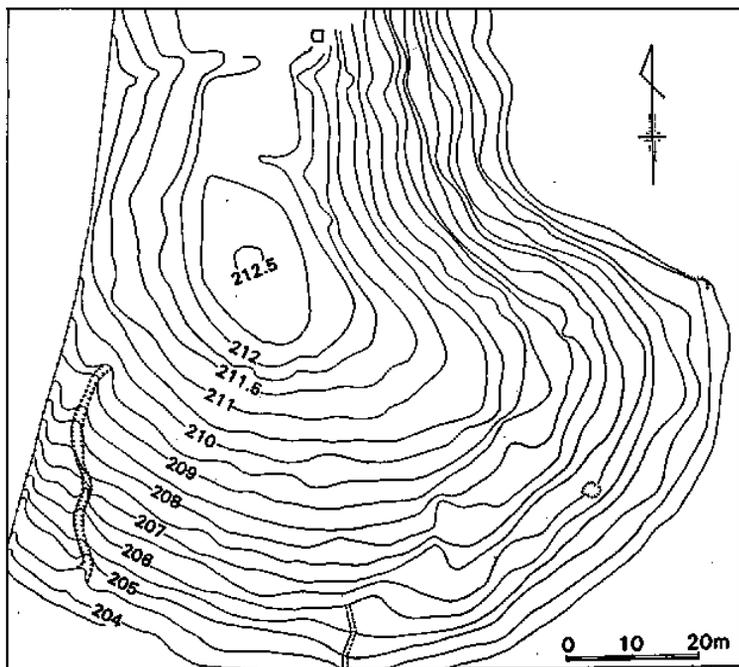


図159 阿武山古墳の墳丘

ことを示している。小さな石室の内壁には棺台を設け、内壁や棺台には漆喰を塗り、台上には麻布を幾重も重ねてつくった黒漆塗りの棺がおかれ、棺内には六〇歳前後と推定される男性が横たわっていた。その頭辺には、ガラス玉をつらねた玉枕がおかれ、身辺に金糸・銀糸が散らばっていた〔梅原未津阿武山古墓調査報告〕『大阪府史』。も〔治一撰蹟名勝天然記念物調査報告〕七し、この貴人が鎌足であるとするなら、この足下にひろがる安威が中臣氏の故地であり、山階精舎から阿武山へ改葬したとする所伝は、その事実の一端を語っていることになる。

古墳の終焉

三島の地に古墳が出現して以後、約三五〇年の間にはさまざまな変遷があった。とくに、五世紀後半以降は、複雑に分化し、多様化する社会の姿を、古墳の変遷は垣間みせてくれる。

人間社会のうつりかわりを端的に示しているといえよう。しかし、なお弥生時代に比べるなら、古墳時代各期のムラの具体像が描ける状況にない。その最大の理由は、個々の墓と集落の対応関係や集落の調査がおくれていることにある。その点で古墳時代の集落の調査は急務であろう。しかし、平野も丘陵も急速に破壊されつつある現状では、その作業は極めて大きな困難を伴う。

さて、集団墓地の中の小さな石室墳でさえ、狐塚のような蟬集する土壙墓群と比べてみるなら、その被葬者が社会的に上位の階層に属する人物であることは明白である。古墳時代が終焉する七世紀前半には、新しい国家機構につらなる一部の「貴人」を除いて、大方は再び集落外辺の共同墓地に埋められるようになる。その画一的な埋葬形態こそ、新たに人びとを組織化しはじめた律令的古代国家の成立した姿であった。一方、漸く浸透してきた仏教に帰依した首長層は、力の限りを尽くして寺の造立に一族の繁栄を期待しはじめた。三島県主の創建と推定される芥川麁寺の出現はその一例である。そして、西の岡本山の南斜面に埋められた蔵骨器は、仏教に帰依した県主一族の墓地であろう。こうした七世紀後半の世相は、かつて営々と古墳の造営に力を傾けてきた社会とは画然と区別される時代に突入したことを示している。そこにまぢかまえていた社会は、戸籍をつくり、計画的に厳しく搾取する機構をそなえた社会であった。古墳が姿を消す段階は、律令的齊一化の時代に包みこまれはじめたことを物語る以外の何ものでもなかった。その巨大な力は、いまや古墳をつくった階層の基盤さえゆるがしはじめていたのであった。